

人類学博物館紀要 第 33 号
(ISSN 0388-8711)

南山大学人類学博物館紀要

第 33 号

南山大学人類学博物館

2015

巻頭言

資料研究と展示

今、博物館活動にとって最も重要なことは何か、と問われたら、ためらわず、学芸員による資料研究と答えるであろう。展示にせよ、普及活動にせよ、学芸員による資料研究の蓄積、そして研究することの喜び（歓び、悦び）が伴わないならば、底の浅い、平板なものになってしまうからである。博物館活動は、いかに理屈をつけようとも、所詮は人が人に対してやることである。そこに問われるのは人間力に他ならない。

さて、人類学博物館ではそのような理念のもと、博物館で出している『人類学博物館紀要』に学芸員は必ず資料研究の成果を発表するようにしてきた。1年間の学芸員の研鑽の結果が問われるわけである。是非とも忌憚ないご批判をいただければ幸いである。

また、2014年度からは、展示活動にもそれを反映させるべく、毎年春（5月頃）に、「紀要の載った資料」展（仮題）を開催することにした。研究され、報告された資料を展示というメディアにも乗せていこうというのである。おそらく、学芸員たちには大きなプレッシャーになるであろうが、自信をもって公開できるだけの成果を期待したい。

昨今の博物館では、どうしても学芸員の調査研究活動が後手に回りがちである。そして、お題目のように普及活動の重要性だけが主張される。もちろん、普及活動の重要性は言うまでもない。普及活動のない博物館は展示を伴うただの研究機関に過ぎなくなる。だが、ここで問いたいのは、展示といい、普及活動というものの根拠は何か、と言うことである。

博物館の理念としては、博物館とは学術研究の成果を社会に公開する場である、ということになるだろう。その学術研究を軽視してはならない。

博物館を「面白く」する手立ては、多くの人が考え、多くの博物館で実践されてきた。しかし、その中には首をかしげたくくなるような試みがないわけではない。その一つの原因としては、博物館が担うべき（というか期待される）役割が拡大化し過ぎていることにあるように思える。

博物館は面白い場所だ、そう思ってもらうためには博物館の原点に回帰してみよう。そこは人間の持つ好奇心を刺激する場所なのだから。

2015年3月
博物館運営委員会委員長
人文学部教授
黒澤 浩

目 次

巻頭言

保美貝塚出土土器の理解のために

..... 大塚達朗... 1

傾いた壺——高蔵遺跡 D 地点出土の壺形土器——

..... 黒澤 浩... 17

パプアニューギニア・セピック河流域地方の仮面

..... 如法寺慶大... 33

南山大学人類学博物館所蔵のリス族の女性の衣服について

..... 西川由佳里... 49

保美貝塚出土土器の理解のために

大塚 達朗

(1)

筆者は、1965年に実施された保美貝塚（渥美半島所在）の発掘調査によって得られた土器資料（小林ほか1966）を再検討して、「保美Ⅱ式」にとらわれずに（なぜならば「保美Ⅱ式」は成り立たないため）、有効な議論が各種できることを示してきた（大塚2011a、2012）。とくに、保美貝塚から安行3a式（帯縄紋系）土器（図1-3）や安行3c式土器（図2-5・7）が出土したことや、檀原式紋様土器（幾何学紋様に三角形刳込紋が加わったものが施紋される土器）（図1-1・2）およびそれに後続する幾何学紋様が施紋される土器（図2-8）が出土したことを強調した（大塚2011a、2012）。あわせて、「吉胡貝塚の晩期縄紋土器は旧・中・新の三段階に区分し得、そのうち晩期旧は更に二つに細別し得るのである」（山内1952：120）と山内清男博士が述べて、吉胡貝塚の晩期縄紋土器について、〈吉胡晩期旧A→吉胡晩期旧B→吉胡晩期中→吉胡晩期新〉という型式遷移を提起したことの学史的意義を再確認した。吉胡晩期旧Aから吉胡晩期新までという型式遷移は、東海地方の土器型式について、異型式（精製土器）と土着土器（粗製土器）という組み合わせでみるべきことが山内博士によって問題提起されたと考えている。

小論では、その問題提起を受けて、東海地方における精製土器の議論を深めたいと

考える。というのも、亀ヶ岡式以外にも、安行3a・3b・3c式に当たるものや、檀原式紋様土器に当たるものなどが、保美貝塚・伊川津貝塚・吉胡貝塚などの土器資料をみわたせばそれぞれ若干認められるからである。

(2)

ところで、檀原式紋様土器を細別して以来（大塚1995）、筆者は、檀原式紋様土器に後続する土器群に関して、安行3d式あたりまで存続するのではないかと思いついた¹⁾。晩期異型式精製土器の遠方への動きは、亀ヶ岡式土器および晩期安行式土器が西方へ、檀原式紋様土器が東方へ、という風にみえるのである。ここで続けるならば、杉田遺跡（杉原・戸沢1963）の「杉田A類」とされる著名な深鉢形土器を取り上げたい（杉原・戸沢1963：43〔第15図-1-3〕）。当該土器では三叉状の入組紋が二段構成となる。よくみると、鋸歯状沈線紋区画は左下がり・右上がりそれぞれ二本の沈線の中に、やや短い沈線紋が二本それぞれ充填される。その鋸歯状の沈線紋区画の中に、当該入組紋が配されるものようである。檀原式紋様（幾何学紋様+三角形刳込紋）は、後期末（安行2式—瘤付土器TK第Ⅳ段階）から晩期初頭（安行3a式—大洞B1式期）に盛行し（大塚1995、2000）、そのあと、三角形刳込紋が消えて幾何学紋様

だけが残ると考えるが(大塚 2011a、2012)、そのように変化してきた幾何学紋様が安行 3d 式に内在化してできあがったのが、この深鉢形土器の紋様区画と推測している。安行 3d 式は、伴出する大洞 C₂ 式に注意するだけではなく、奈良瀬戸遺跡(川崎ほか 1969)の独特な土器(口縁部と頸部の二ヵ所に二本の横走沈線による狭い区画の中に刻紋ないしは列点紋を充填した深鉢形土器)にも注目し(川崎 1996)、さらには、檀原式紋様に後続する幾何学紋様の系譜からも分析する必要がある、というのが筆者の見方である。保美貝塚出土土器資料の再報告および再検討の際には、檀原式紋様土器および後続する幾何学紋様土器が東方へ動くという認識を開陳した(大塚 2011a、2012)。小論は、保美貝塚の檀原式紋様土器の意義をあらためて論じることからはじめたい。

(3)

さっそく議論に入りたいところであるが、晩期初頭をどう考えるべきか、遠回りの議論で申し訳ないが、一端そのことに入る。なぜならば、後期末を晩期初頭にくり入れてしまうきわめて不可解な動きがあるためである(鈴木 1987、1993、2012; 新屋 2008)。

山内博士は、著名な「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」(山内 1930)および「日本遠古之文化 三 縄紋土器の終末」(山内 1932)において、実は、安行式(細別以前)と亀ヶ岡式とが並行関係にあると考えていた²⁾。前者では、「大洞 B 式直前」(山内 1930: 147)は、「奥羽の亀ヶ岡式と関東の安行式との共同の母体」(山内

1930: 147)であった。その「共同の母体」発言から、安行式が亀ヶ岡式に並行すると判断していたことがわかる。実際、博士は、「奥羽の亀ヶ岡式前半と関東の安行式とは略々同時代に隣り合って存在して居ったものと考えられる」(山内 1930: 150)と述べていた。後者では、「しかしながら、ここで注意すべきことはこの安行式のうちに亀ヶ岡式土器が少数混在することである。……東北の亀ヶ岡式土器の細別に比較して見ると、関東の亀ヶ岡式的な土器は、最初から中頃まで、ざっと前半のものに相当して居る。これは東北に於ける亀ヶ岡式と関東に於ける安行式との年代的並行を示して居る」(山内 1932: 49-50)と述べて、亀ヶ岡式と安行式(細別以前)の並行関係をあいかわらず明言していた。

1932 年よりあとの山内博士による本格的な安行式細別研究は、亀ヶ岡式と安行式の並行関係を見直すことに尽きる。見直しの重要な経緯報告が、1939 年の『日本遠古之文化』(補註付・新版)に附された註 24 でなされたことに注意を喚起したい。「関東の安行式については甲野氏「真福寺貝塚報告」(昭 3)が典拠とされて居る。この式は氏によって二大別されたが、自分は四つに細別して居る。山内「真福寺貝塚の再吟味」(ドルメン 3ノ 12 昭 9)、大町片倉両氏「下総岩井貝塚」(先史考古学 1ノ 1 昭 12)参照。この細別のうち亀ヶ岡式を伴うのは後半のみであって、前半は東北の亀ヶ岡式直前(後期の終)に対比し得ることとなった。本文の記載はこの所見に照らして相当改訂を要する」(山内 1939: 43)、と。ちなみに、「本文の記載」とは、先に紹介した「日本遠古之文化 三 縄紋土器の終末」にて、

亀ヶ岡式と安行式の並行関係を明言した部分（前掲）である。

ここで、「亀ヶ岡式直前（後期の終）」の「後期」が、晩期を設定した際（山内 1937）の大別の後期（現行）であることと、その後期の「終」は、当然、晩期直前であることに注意を喚起したい。「大洞 B 式直前」（前掲）＝「亀ヶ岡式直前（後期の終）」（前掲）という関係を逆にたどると、「大洞 B 式直前」は、晩期直前すなわち後期末である。とどのつまり、学史的には、以下の三点を弁えねばならない。

- ① 1930 年の「奥羽の亀ヶ岡式と関東の安行式との共同の母体」という認識は、誤った編年関係からもたらされた刹那的な認識にすぎない。
- ② 「奥羽の亀ヶ岡式と関東の安行式との共同の母体」という認識は、やがて博士自らの手で払拭された（山内 1934）。
- ③ 「大洞 B 式直前」＝「亀ヶ岡式直前（後期の終）」は、後期末の瘤付土器のことである（山内 1964a : 149）。

残念ながら、鈴木加津子（1987、1993、2012）が、縄紋晩期研究として、「共同の母体」や「大洞 B 式直前」にこだわる真意は全く分からない³⁾。いえることは、鈴木にしたがうかぎり、関東地方の雅楽谷遺跡（橋本 1990）の優秀な一括遺物二例（SK5・SK26）が、ともに晩期初頭にされてしまうことである。「共同の母体」や「大洞 B 式直前」にこだわらずに、安行 3a 式標本土器である小豆沢貝塚出土深鉢形土器（以下、小豆沢例）（図 1-6）と、山内博士の後期安行 2 式の細別研究（山内 1964b）および晩期安行 3a 式の定義的説明（山内 1966）に準拠するかぎり、SK5 が後期末安行 2 式の

一括遺物（瘤付土器 TK 第Ⅳ段階並行）で、SK26 が晩期初頭安行 3a 式の一括遺物（大洞 B1 式並行）であると鑑定できるはずである（大塚 2000 : 258 [図 73 雅楽谷遺跡 5 号土坑安行 2 式〈1~4〉一括遺物と 26 号土坑安行 3a 式〈5~8〉一括遺物]）。

(4)

ここからが本論である。図 1-1・2 は保美貝塚から出土した土器片である。1・2 は同一個体で、器形は波状口縁深鉢形である。1 は波頂部破片で、波頂部に沿って刻紋帯（せまい二本沈線区画の中に短い縦刻紋が充填される）がめぐり、波頂部の下に三角形刳込紋が施紋される。三角形刳込紋は器面を削り取ることで作出されたもので、三角形刳込紋の底辺部には縦刻紋が並び、三角形刳込紋の頂部の先には円形凹点紋が付随する。三角形刳込紋の底部に縦刻紋が並び、三角形刳込紋の頂部の先には円形凹点紋が配されることは、檀原式紋様土器では通有なことである。2 は波底部破片で胴部紋様があるのは分かるが、それ以上は不明である。この保美貝塚の檀原式紋様土器は、波状口縁深鉢形の場合の稀少例であって、当例の波頂部付近の様相が入組紋系安行 3a 式の基準である小豆沢例（図 1-6）の波頂部付近の様相とよく似たものとする。つまり、保美貝塚例の波状口縁に沿う刻紋帯は小豆沢例の波状口縁に沿う沈線紋に対応しており、前者の波頂下に三角形刳込紋があるのは、後者の波頂下に三叉紋があることに対応していると考えられる。

そのような比較検討から、檀原式紋様土器である保美貝塚例（図 1-1・2）は、晩期安行 3a 式の基準である小豆沢例（図 1-6）

と年代的に並行すると考える。ということは、保美貝塚例が大洞 B1 式に並行するということでもある。

再度、保美貝塚例の三角形刳込紋に注目すると、東海地方の馬見塚 i 地点（増子 1981）の鉢形土器（図 1-5）が、結論を先によれば、非常によく似た三角形刳込紋（三角形刳込紋の底辺部には縦刻紋が並び、三角形刳込紋の頂部の先には円形凹点紋が付随する）を有するといえる。本例では、X 字状区画（条線によって幅広の X 字状区画が形成される）によって形成される空間（ひし形の空間と、逆位の三角形と正位の三角形が頂部で向かい合うような空間とが並ぶ）の中に、三角形刳込紋二つが三角形の頂部で相対するものと、三角形刳込紋二つが三角形の底辺で背合わせとなるものが配される。その中で、図によれば、左側の背合わせとなるものの方の、正位の三角形刳込紋と保美貝塚例の三角形刳込紋とがよく似ているのである。X 字状区画によって形成される空間（ひし形の空間と、逆位の三角形と正位の三角形が頂部で向かい合うような空間とが並ぶ）の中に、三角形刳込紋二つが三角形の頂部で相対するものと、三角形刳込紋二つが三角形底部で背合わせとなるものが配されることでみれば、檀原遺跡の檀原式紋様土器の中に、馬見塚 i 地点例とそっくりな土器が一つある（末永ほか 1961：図版第五〇-1）⁴⁾。岡田憲一の分類によれば、「壺 A III 類」である（岡田ほか 2011：33 [図 17-145]、36）。

関東地方の東浦遺跡（鈴木 1985b）の浅鉢形土器（図 1-4）では、上下向かい合う弧線紋区画（集合沈線で作られる）の連結部分に、正位の三角形刳込紋が配される。こ

の東浦例にみられる三角形刳込紋（三角形刳込紋の頂部の先に円形凹点紋が配される）も、保美貝塚例の三角形刳込紋に近いものである。

(5)

檀原式紋様土器・保美貝塚例の三角形刳込紋の類例点検から、保美貝塚例（深鉢形土器：図 1-1・2）・馬見塚 i 地点例（鉢形土器：図 1-5）・檀原例（壺形土器）・東浦例（浅鉢形土器：図 1-4）が同一段階と考える。筆者の檀原式紋様土器の段階分類（大塚 1995）によれば、檀原式紋様・檀原段階の資料がより充実したことになる。

その檀原式紋様・檀原段階の三角形刳込紋がとげ状あるいは角状の三叉紋で写されることに関して、そのとげ状あるいは角状の三叉紋の在り方から判断すると、中谷遺跡（奈良ほか 1981）から得られた清水天王山式土器は晩期初頭（檀原式紋様・檀原段階—安行 3a 式—大洞 B1 式）という議論が積極的にできるのである。直接取り上げるのは、中谷遺跡第 8 号住居址覆土中から出土した深鉢形土器（図 1-7）である。4 単位の小波状口縁深鉢形で、口縁下に刻紋を伴う隆帯がめぐり、隆帯の下に楕円区画と三叉状入組紋が一体化したような単位紋がめぐり、さらに、それら単位紋の下に羽状沈線紋による帯がめぐるといった紋様構成である。注目すべきは、それら単位紋の間に、下向きおよび上向きのとげ状あるいは角状の三叉紋が配されていることである。下向きおよび上向きのとげ状あるいは角状の三叉紋は、離れてはいるが、上下で向きあうようになっており、筆者が指摘した正に晩期初頭の様相である（大塚 1995：116-130）。

もう一例、中谷遺跡（長沢 1996）の清水天王山式土器を取り上げたい。図 1-9 は、口縁下にめぐる隆帯を基準に、その上の紋様構成と、その下ある、楕円区画の単位紋と、さらにその下の羽状沈線紋とを比較すれば、よく似ていると考える。さらに、図 1-9 には、単位紋の間に、下向きおよび上向きのとげ状あるいは角状の三叉紋が配されているが、それもよく似ていると考える。さきほど取り上げた中谷遺跡第 8 号住居址例と図 1-9 とを比べて、後者の方が、多少紋様がくずれているという見方も可能であろう。いずれにせよ、単位紋の間に共通して配されることから、下向きおよび上向きのとげ状あるいは角状の三叉紋は偶然ではなく、編年的に有意と考える⁹⁾。

(6)

檀原式紋様・滋賀里段階の基準の一つが、檀原遺跡出土の鉢形土器（図 1-10）である。三角形刳込紋（逆位・正位の三角形刳込紋が頂部でつながるように相対する）によって整った楕円形区画（区画内には水平な沈線紋が配される）が仕立てられている。ポイントは、この檀原例では、逆位・正位の三角形刳込紋が頂部でつながっていることである。図 1-11・図 2-3 は、台囲貝塚 B トレンチ（小井川 1980）出土の後期末瘤付土器 TK 第 IV 段階と考える（大塚 1995：125-130）。その一つ（壺形土器：図 1-11）にみられる下向きの〈t〉がとげ状あるいは角状の三叉紋で、楕円形区画のようなもの一部を形成していることが分かる（上向きの〈t〉はみられない）。その〈t〉は、檀原例（図 1-10）の三角形刳込紋の在り方に通じると考える。山辺沢遺跡（玉川ほか

1985）の深鉢形土器（図 1-8）は、頸部に起点終点の入組紋があり、胴部には横つなごりの入組紋がある。これは、後期末瘤付土器 TK 第 IV 段階と安行 2 式のキメラである。その胴部の横つなごりの入組紋中に、小瘤のところ、下向きの〈t〉と上向きの〈t〉がつながるようになっている。これも、いまみた檀原例の三角形刳込紋の在り方に通じると考える。

台囲貝塚 B トレンチのもう一例（台付浅鉢形土器：図 2-3）は、台部の削り抜かれた部分に着目すると、小瘤のところ逆位・正位の三角形の頂部がつながるように相対する部分〈p〉と正位・逆位の三角形が底辺で背合わせてくっつく部分〈q〉がある。〈p〉・〈q〉については、檀原式紋様・滋賀里段階のもう一つ基準である滋賀里遺跡（加藤・丹羽ほか 1973a・b）出土の鉢形土器（図 2-1）の楕円形区画を形成する三角形刳込紋の在り方（逆位・正位の三角形刳込紋が頂部でつながるように相対する/正位・逆位の三角形刳込紋が底辺で背合わせてくっつく）を写したものとのかえに至った（大塚 1995：125-130）。

檀原式紋様・滋賀里段階の三角形刳込紋（図 1-10・図 2-1）を写し取った結果が、後期末瘤付土器 TK 第 IV 段階の〈t〉・〈p〉・〈q〉であることを、重要な論点のため、再確認しておく。

上ノ段遺跡出土土器の再報告（百瀬 2006a・b）にて図化し直され、さらに、中村中平遺跡の報告（百瀬 2011）の中で図が直された土器（図 2-2）に着目したい。百瀬長秀が「装飾隆帯文浅鉢」と分類した土器群の一つである（百瀬 2006b：21-23、2011：141-144）。結論として、百瀬は、当該資料

を晩期に位置付けるようである（百瀬 2011：263 [挿図 55（下）装飾隆帯文浅鉢変遷図]）。

筆者は別な考えを持つ。結論を先に述べれば、上ノ段遺跡出土土器の「装飾隆帯文浅鉢」を後期末に位置付けるのである。まず、当該土器をみるならば、縦隆帯の貼付装飾によって明確な区画とはならないまでも、その縦隆帯を区画と見立てたい。その中では、縄紋が充填され、左右から向きあう三叉状紋がある部分はよく注目される紋様であろう。筆者は、それではなく、それをさらに囲むかのようにみえる区画紋描線の方に注目したい。区画線は、「つ」の字の左右逆の「逆つ」の字と「つ」の字が向かい合うようにみえるはずである。そこで、比較の対象として檀原式紋様・滋賀里段階の鉢形土器（図 2-1）を取り上げる。三角形刳込紋による陰刻部によって浮き上がる陽刻部を眺めると、「つ」の字の左右が逆の「逆つ」の字紋と「つ」の字紋が向かい合うように見立てられる。つまり、滋賀里例の陽刻部端を沈線で写せば、上ノ段例の区画紋ができあがるだろうと考えることから、上ノ段例を滋賀里例に並行するとみなすのである。つぎに、同じ上ノ段例の「逆つ」の字紋と「つ」の字紋が向かい合う単位紋（中に縄紋が充填され、さらに左右から向かい合う三叉状紋が配される）の在り方が、先に取り上げた中谷遺跡第 8 号住居址例の楕円区画と三叉状入組紋が一体化したような単位紋へと変化すると考える⁹⁾。

以上から、上ノ段遺跡の「装飾隆帯文浅鉢」は後期末（檀原式紋様・滋賀里段階—安行 2 式—瘤付土器 TK 第Ⅳ段）と考える次第である⁷⁾。

(7)

檀原式紋様土器は時期的には縄紋後期末から晩期初頭にかけて展開し、地域的には、九州から本州に広く分布するもので、檀原式紋様は部分的ではあるが東日本の同時期の紋様体系に受け入れられるものである。列島の規模で後期末から晩期初頭にかけての広域編年を構築する上で、檀原式紋様土器の広域分布は重要な事象である。とくに、後期末から晩期初頭にかけて、九州～本州の範囲での地域間関係が緊密化した、という把握をしなければならないのである（大塚 1995、2000）。

ここでは、つぎの三点を強調しておきたい。

- ① 保美貝塚例（深鉢形土器）と安行 3a 式小豆沢例との対比によって、筆者の段階分類である檀原式紋様・檀原段階—安行 3a 式—大洞 B1 式）並行という議論（大塚 1995、2000）がより積極的にいえることとなった⁸⁾。
- ② 筆者が説く檀原式紋様・滋賀里段階は後期末（檀原式紋様・滋賀里段階—安行 2 式—瘤付土器 TK 第Ⅳ段階）という議論（大塚 1995、2000）がより積極的にいえることとなった。
- ③ 檀原式紋様・滋賀里段階から檀原式紋様・檀原段階へという推移に応じて、三角形刳込紋がとげ状あるいは角状の三叉紋で写し取られるという議論（大塚 1995、2000）もより積極的にいえることとなった⁹⁾。

檀原式紋様・滋賀里段階は、三角形刳込紋によって作られる陰刻部と水平沈線紋が充填される陽刻部が調和的になっている、

と見立てることができるであろう。調和的な状態での三角形刳込紋のとげ状あるいは角状の三叉紋への転写(図 1-8・11、図 2-3)が基本であるが、地方によっては、その陽刻部が転写されるのである(例、図 2-2)。

他方、櫃原式紋様・櫃原段階は、三角形刳込紋に変化がみられ、また、陽刻部にも陽刻部に配される紋様にも変化が顕著になる、と見立てることができるであろう。陰刻部と陽刻部が調和的ではなくなったためということであろうが、三角形刳込紋単体の場合(図 1-1・4)、逆位・正位の三角形刳込紋が頂部で相対する場合(図 1-5 の右側)、正位・逆位の三角形刳込紋が底辺で背合わせする場合(図 1-5 の左側)のように、三角形刳込紋自体が単位紋的振る舞いをするようになったといえよう。三角形刳込紋自体の単位紋的振る舞いは、亀ヶ岡式や晩期安行式の荷担者が西日本に登場すること(大塚 2011a、2012)と関係があると推測している。

三角形刳込紋が抜けた幾何学紋様土器(図 2-4)が吉胡貝塚の吉胡旧 B 段階(大洞 BC 式土器・安行 3b 式土器が出土)にある。吉胡貝塚の吉胡中段階(大洞 C₁ 式土器・安行 3c 式 [図 2-6] が出土)には、幾何学紋様土器の存在は不明である。保美貝塚には、安行 3c 式土器(図 2-5・7)や幾何学紋様土器(図 2-8)がある。この幾何学紋様土器は安行 3c 式に並行するのであろう。吉胡旧 B 段階の幾何学紋様土器と杉田 E 類の土器(図 2-9)を比べると、後者の方が、条線による鋸歯状区画の中の様相が後出的である。これは、安行 3c 式に、あるいは、安行 3d 式に並行するのであろう。ともあれ、幾何学紋様土器も時期的な変化が

あり、分布も広いようである(大塚 2011a、2012)。そのようなことがみえてくると、吉胡貝塚第 2 トレンチの報文に記載された、山内による晩期の総括は問題であろう(以下参照)。

縄紋式晩期。縄紋式晩期は東北地方の亀ヶ岡式土器とこれに並行する各地の土器を指すものである。昭和初年、亀ヶ岡式又は近似の土器が、関東地方、三河方面を含む中部地方の各地に発見されることが、新しく注目された。そして後には畿内にさえ見出されるに至った。この事実に関する議論は別として、亀ヶ岡式土器が東北において発達し、その発達の各段階において、他の地方に輸出され、そこで模倣されたという見解の妥当性は認められていった。亀ヶ岡式を輸入し模倣した地方の土着の土器の性質が問題とされ、関東地方では安行式の後半の型式が、これに当り、abc の三型式に細分されるに至った。一方中部及畿内地方では無紋又は條痕の多い粗製土器を主体とする型式が考えられ、更に亀ヶ岡式の伴存は見られないが、この種の土着土器と同様又は近縁のものが中国・九州地方にも存在することが明かとなった。かくして亀ヶ岡式とこれに並行する型式が九州に至るまで存在することが可能となると共に、晩期なる名称がこれら一連の土器に加えられ、後期から分割されたのである。(山内 1952 : 119)

山内が、中部以西の西日本では早く精製土器から粗製土器へ相転移することを見通したことは卓見である(私見では、東海地方が最も早く後期後半には精製土器から粗

製土器へ相転移すると考える)。そのため、亀ヶ岡式が西日本で登場するのであれば、それが在地土器に対して精製土器であり、さらにはそれを手本に模倣品が作られたと山内は考えた。櫃原式紋様土器および後続する幾何学紋様土器の展開を西日本に想定しなかったのである¹⁰⁾。櫃原式紋様土器や後続する幾何学紋様土器は、粗製土器に比して量的に非常に少なく、それでいて分布は広いが、東日本土器型式の紋様体系にかかわるなどとは思いつまなかったであろう。

精製土器が粗製土器へ相転移する西日本において、量的には少ないが、精製土器は櫃原式紋様土器や後続する幾何学紋様土器とみればいいのである。西日本において、瘤付土器や後期安行式土器、亀ヶ岡式土器や晩期安行式土器は、模倣されたものではなく、当該土器荷担者の動きでみるべきである(大塚 2005、2007、2011a、2012)¹¹⁾。つまりは、後期末・晩期初頭を考える上で、関東北の異型式(精製土器)と土着土器(粗製土器)ではなく、櫃原式紋様土器(精製土器)と土着土器(粗製土器)が東海地方の基本構成であると主張したい。

謝 辞 小論を起稿するに際して、以下の方々からご教示などをいただいた。記して感謝の意としたい。

百瀬長秀 伊藤正人 村田章人 岡田憲一 長田友也

註

- 1) 鈴木加津子(1985b)は、三角形剝込紋の編年の位置付けおよび存続期間の見立ての二点で誤った(櫃原式紋様土器

の研究動向に関しては、岡田憲一の論攷参照[岡田ほか 2011: 295-309])。だが、「追記」の中で関東地方のささら遺跡(橋本ほか 1985)出土土器群中から「杉田 E 類」に相当するものとして、一例(鉢形土器)を指摘した点はむしろ評価したい(鈴木 1985b: 276)。ただし、その一例(橋本ほか 1985: 99 [第 67 図-25])は「杉田 E 類」に対比できても、もう一例(橋本ほか 1985: 132 [第 90 図-13])は「関西系晩期有文土器」ではない。後者は、口縁部と体部に細かい縦刻紋を伴う沈線区画帯があるが、口縁部の縦刻紋帯の下方に当該刻紋に付随する細かい点列紋がうかがえる。これは安行式に固有の施紋手法上の“クセ”であり、晩期安行式の側に属するべき資料である。「杉田 E 類」は櫃原式紋様土器に後続する土器で、本文図 2-9 の土器である。

- 2) 山内清男博士が晩期(五大別)を設定する以前、亀ヶ岡式は、「第四縄紋式即ち薄手式」の中の第三群の基準であった(山内 1932: 46)。そして、安行式(細別以前)は、関東地方の第三群であり、あわせて、「第四縄紋式即ち薄手式」は第一群→第二群→第三群という遷移が考えられていたのであった(山内 1932: 46)。
- 3) おそらく、鈴木加津子は、㊦研究の出版からすでに後期末・晩期初頭の学史的な理解を欠いていたと思われる(鈴木 1985a・b)。また、鈴木の研究は、㊧晩期初頭安行 3a 式の基準である小豆沢例についての関心が低いのも特徴である。1960年代に、滋賀里遺跡出土の異

系統波状口縁深鉢形土器が晩期初頭に、さらには、亀ヶ岡式に位置付けられる動きがあった（佐原ほか 1960：183 [014-a]；坪井 1962：130 [第3・1表-亀ヶ岡式]）。この滋賀里例が晩期初頭に位置付けられたことは鈴木には好都合だと思われるが、しかし、㊦鈴木が滋賀里例を詳述することはない。筆者は、滋賀里例→小豆沢例とみて、後期安行2式から晩期安行3a式への問題として考えるべきなどを説いた（大塚 1981）。しかも、「共同の母体」や「大洞B式直前」を説いた山内（1930）において、亀ヶ岡式精製土器が亀ヶ岡式文化圏外に移されしかもそこで模倣される事象をみいだして各地によく似た地方社会が分立することを示唆した“亀ヶ岡式精製土器移入・模倣論”（と筆者は呼ぶことにして山内の認識を評価している [大塚 2007、2011b]）は山内博士の研究の白眉であるが、㊦鈴木は“亀ヶ岡式精製土器移入・模倣論”にも関心を示さない。㊦～㊦が、「共同の母体」や「大洞B式直前」にこだわる真意は全く分からない」と本文で述べた直接的な理由である。

- 4) 筆者は、以前、馬見塚i地点例と檀原例が極似する根拠に「付加的弧線紋」「紋様〈k〉」をあげた（大塚 1995：101 [図 11]）。この二例は、檀原式紋様・檀原段階の典型としてあつかったものである（大塚 1995）。この二例がよく似ているとみることは支持されているようである（岡田ほか 2011：36）。
- 5) 清水天王山式土器については、多くの

研究がある（小野・奈良 1989；設楽 2008a・b；百瀬 1999b・c、2001 など）。ほかの土器型式も含めて、中部・東海地方の後期・晩期型式編年研究に取り組んできた百瀬（1999a、2006a・b、2011）によって、清水天王山式土器の組列は一層妥当なものとなったと考える。小論は、諸論が総じて注目する中谷遺跡第8号住居址例（図 1-7）をめぐって、清水天王山式土器の組列に対して後期・晩期の年代的区分となる定点的な土器と評価したのである。

- 6) 設楽博己は台囲貝塚Bトレンチの壺形土器（図 1-11）の胴部の三叉状入組紋と中谷遺跡第8号住居址例（図 1-9）の胴部の単位紋を同列に扱ったが（設楽 2008a：463 [図 223 瘤付土器と清水天王山式土器のモチーフ]）、前者の三叉状入組紋は小瘤を起点にした分岐入組紋とみるべきであって、後者は単位紋の系譜にある別物と筆者は考える。筆者の結論は、本文で述べた通りである。
- 7) 安行2式は、大きく前半・後半に分けて考えている。安行2式の前半が瘤付土器TK第Ⅲ段階並行で、安行2式の後半が瘤付土器TK第Ⅳ段階並行である（大塚 1995、1996、2000、2005）。その編年関係を導いた手続きを説明しておきたい。入組紋について、分類基準を横つながり（紋様帯中で入組紋が環状に横につながる）か、あるいは、上下起点終点（紋様帯の上下端が入組紋の起点終点になる）かに求めると、横つながりの入組紋だけが施紋される土器と上下起点終点の入組紋だけが施紋

される土器と上下起点終点のものと横つながりのものの双方が併用される土器の三種類にきれいに分類できる。他方、鈴木（1985a、1987）は、横つながり/起点終点という入組紋の弁別ができていない。横つながりの入組紋だけが施紋される土器が関東地方の型式で、上下起点終点のものだけが施紋される土器が東北地方の型式で、上下起点終点のものと横つながりのものの双方が併用される土器をキメラと見立て、そのキメラが編年上の決め手となるのである（大塚 1995、1996）。

- 8) 馬見塚 i 地点例は、大洞 BC 式期と報告された（増子 1981）。東浦例は、大洞 C₁ 式期と報告された（鈴木 1985b）。しかも、それぞれの報文では、他の土器群との一括性が強調されるが、一括性は危ういと考ええる。
- 9) 檀原式紋様土器の変遷を檀原式紋様・滋賀里段階から考えようとする筆者の見立ては、どうやら、支持されているようである（岡田ほか 2011:336-351）。しかし、筆者が問題提起している、後期末（安行 2 式—瘤付土器 TK 第 IV 段階）・晩期初頭（安行 3a 式—大洞 B1 式）の様相に対して詳しく論じない姿勢はいかがなものであろうかと思う。
- 10) 安行 3c 式土器（図 2-5~7）が東海地方に登場することは、檀原式紋様のあと（三角形刳込紋が抜けたあと）、西日本に登場する三叉紋の系譜を考える上で重要であろう。
- 11) 晩期の木菟土偶が東海地方に出土していたことが、伊藤正人（2014）によって明らかになった。

引用文献

- 新屋雅明 2008 「晩期安行式土器」『総覧 縄文土器』、アム・プロモーション、716-723 頁。
- 伊藤正人 2014 「麻生田当貝津遺跡出土のミヅク土偶について」『三河考古』24:1-18。
- 大塚達朗 1981 「小豆沢出土安行 3a 式深鉢再考—三叉紋の系譜から—」『彌生』11:14-22。
- 大塚達朗 1995 「檀原式紋様論」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』13:79-141。
- 大塚達朗 1996 「縄文時代（1）土器—山内型式論の再検討より—」『考古学雑誌』82(2):11-25。
- 大塚達朗 2000 『縄文土器研究の新展開』、同成社。
- 大塚達朗 2005 「縄文土器製作に関する理解—その回顧と展望—」『考古学フォーラム』18:2-12。
- 大塚達朗 2007 「型式学の射程—縄文土器型式を例に一」『現代社会の考古学』（現代の考古学 1）、朝倉書店、184-201 頁。
- 大塚達朗 2011a 「檀原式紋様土器と安行 3c 式土器からみた保美貝塚」『保美貝塚の研究』（南山大学人類学博物館オープンリサーチセンター研究報告 3）、南山大学人類学博物館、101-112 頁。
- 大塚達朗 2011b 「亀ヶ岡式土器研究の今日的基礎」『縄文時代』22:119-140。
- 大塚達朗 2012 「保美貝塚出土の安行 3c 式土器」『南山大学人類学博物館紀要』30:1-31。
- 大塚達朗ほか 2011 『保美貝塚の研究』（南山大学人類学博物館オープンリサーチセンター研究報告 3）、南山大学人類学博物館。
- 岡田憲一ほか 2011 『重要文化財 檀原遺跡出土品の研究』（檀原考古学研究所研究成果 11）、奈良県立檀原考古学研究所。

- 小野正文・奈良泰史 1989「清水天王山式土器様式」『後期 晩期 続縄文』（縄文土器大観4）、小学館、334-337頁。
- 加藤修・丹羽佑一ほか 1973a『湖西線関係遺跡調査報告書（本文編）』、真陽社。
- 加藤修・丹羽佑一ほか 1973b『湖西線関係遺跡調査報告書（図録編）』、真陽社。
- 川崎義雄 1996「いわゆる安行3d式土器の誕生」『画龍天晴』（山内清男先生没後25年記念論集）、山内先生没後25年記念論集刊行会、250-257頁。
- 川崎義雄ほか 1969『奈良瀬戸』、大宮市教育委員会。
- 小井川和夫 1980「宮戸島台囲貝塚出土の縄文後期末・晩期初頭の土器」『宮城史学』7：9-21。
- 小林知生ほか 1966「保美貝塚」『渥美半島埋蔵文化財調査報告』、愛知県教育委員会、1-12頁。
- 佐原眞ほか 1960『京都大学文学部博物館考古学資料目録 第1部』、京都大学文学部。
- 設楽博己 2008a「土器に関する諸問題の検討」『清水天王山遺跡 第4次—5次発掘報告』（本文編分冊2）、静岡市教育委員会、425-496頁。
- 設楽博己 2008b「清水天王山式土器」『総覧 縄文土器』、アム・プロモーション、728-735頁。
- 末永雅夫ほか 1961『橿原』（奈良県史跡名勝天然記念物調査報告17）、奈良県教育委員会。
- 杉原荘介・戸沢充則 1963「神奈川県杉田遺跡および桂台遺跡の研究」『考古学集刊』2（1）：17-48。
- 鈴木加津子 1985a「縄文時代晩期の土器」『外塚』、下館市教育委員会、221-262頁。
- 鈴木加津子 1985b「関東北の関西系晩期有文土器小考」『古代』80：258-276。
- 鈴木加津子 1987「安行3a式形成過程の一考察」『埼玉の考古学』（柳田敏司還暦記念論文集）、新人物往来社、183-198頁。
- 鈴木加津子 1993「真福寺小考—安行式と亀ヶ岡式における編年と分布の推敲—」『埼玉考古』30：15-62。
- 鈴木加津子 2012「大宮台地鳩ヶ谷支台の晩期初頭の土器—土坑出土土器から見る縄文時代後期/晩期の界線—」『古代』128：27-47。
- 玉川一郎ほか 1984『山辺沢—福島県飯館村における縄文時代後・晩期集落の調査—』（飯館村文化財調査報告書5）、飯館村教育委員会。
- 坪井清足 1962「縄文文化論」『原始および古代〔1〕』（岩波講座日本歴史1）、岩波書店、109-138頁。
- 長沢宏昌ほか 1996『中谷遺跡 山梨リニア実験線建設に伴う事前調査』（山梨県埋蔵文化財センター調査報告書116）、山梨県教育委員会。
- 奈良泰史ほか 1981『中谷・宮脇遺跡 中央自動車道富士吉田線四車線化工事に伴う発掘調査報告書』（都留市埋蔵文化財調査報告書8）、都留市教育委員会・日本道路公団東京第二建設局。
- 橋本勉ほか 1985『ささら（Ⅱ） 国道122号線バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ』（埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書47）、埼玉県埋蔵文化財調査事業団。
- 橋本勉ほか 1990『雅楽谷遺跡 県立蓮田養護学校関係埋蔵文化財発掘調査報告』（埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書93）、埼玉県埋蔵文化財調査事業団。
- 増子康真 1981「東海地方西部の縄文文化」

- 『東海先史文化の諸段階（本文編）補足改訂版』、紅村弘、42-97頁。
- 百瀬長秀 1999a「中ノ沢式土器の再検討」『長野県考古学会誌』89：21-47。
- 百瀬長秀 1999b「清水天王山式の入組文（上）」『長野県考古学会誌』91：1-42。
- 百瀬長秀 1999c「清水天王山式の入組文（下）」『長野県考古学会誌』92：31-53。
- 百瀬長秀 2001「清水天王山式の終焉と周辺」『長野県考古学会誌』95：20-44。
- 百瀬長秀 2006a「上ノ段遺跡出土土器—上ノ段式、中ノ沢K式、中ノ沢B類型の標準相（上）—」『長野県考古学会誌』115：42-66。
- 百瀬長秀 2006b「上ノ段遺跡出土土器—上ノ段式、中ノ沢K式、中ノ沢B類型の標準相（下）—」『長野県考古学会誌』116：15-47。
- 百瀬長秀 2011「縄文時代後期～晩期の土器」『中村中平遺跡 遺物編』（分冊1）、飯田市教育委員会、pp. 21-269。
- 山内清男 1930「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」『考古学』1(3)：139-157。
- 山内清男 1932「日本遠古之文化 三 縄紋土器の終末」『ドルメン』1(6)：46-50。
- 山内清男 1934「真福寺貝塚の再吟味」『ドルメン』3(12)：34-41。
- 山内清男 1937「縄紋土器型式の細別と大別」『先史考古学』1(1)：29-32。
- 山内清男 1939『日本遠古之文化』（補註付・新版）、先史考古学会。
- 山内清男 1952「第二トレンチ」『吉胡貝塚』（埋蔵文化財発掘調査報告1）、文化財保護委員会、93-124頁。
- 山内清男 1964a「縄文式土器・総論」『縄文式土器』（日本原始美術1）、講談社、148-158頁。
- 山内清男 1964b「図版解説 198 台付異形土器 安行2式」『縄文式土器』（日本原始美術1）、講談社、185頁。
- 山内清男 1966「縄紋式研究史における茨城県遺跡の役割」『茨城県史研究』4：1-12。
- 山内清男ほか 1971「山内清男先生と語る」『北奥古代文化』3：59-80。

図の出典

図1-1・2・3、図2-5・7・8：大塚ほか（2011）より 図1-4：鈴木（1985b）より 図1-5：増子（1981）より 図1-6：大塚（1996）より 図1-7：奈良ほか（1981）より 図1-8・11、図2-3：大塚（1995）より 図1-9：長沢ほか（1996）より 図1-10：末永ほか（1961）より 図2-1：加藤・丹羽ほか（1973b）より 図2-2：百瀬（2011）より 図2-4・6：山内（1952）より 図2-9：杉原・戸沢（1963）より

後記

小論は、2014年度に大塚に与えられた南山大学人文学部個人研究費（特別配分）による研究成果の一部を含むものである。

（南山大学人文学部教授）

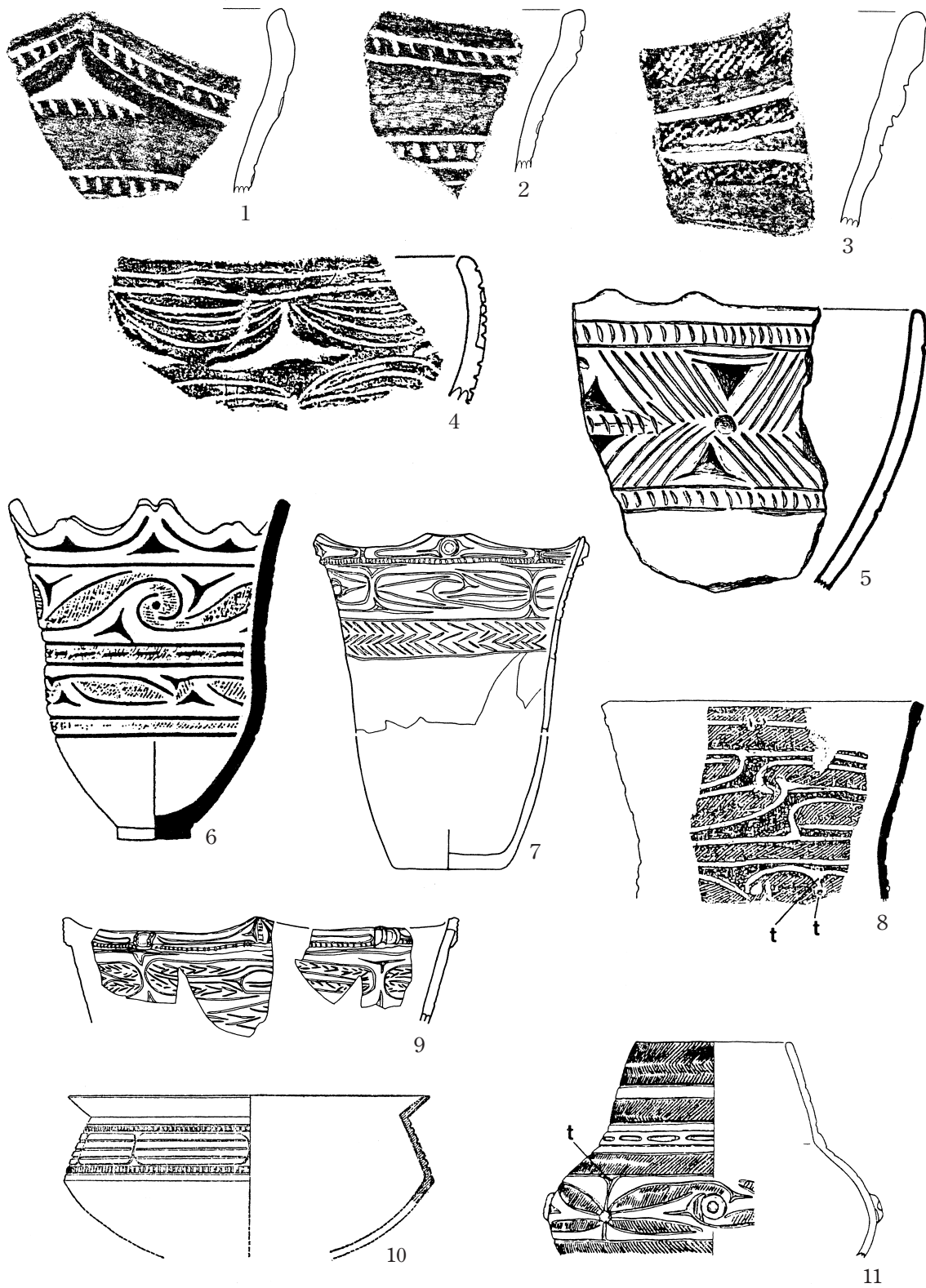


図1 保美貝塚などの土器Ⅰ (1~3 保美貝塚、4 東浦、5 馬見塚i、6 小豆沢貝塚、7・9 中谷、8 山辺沢、10 榎原、11 台岡貝塚B トレンチ) [縮尺不同]

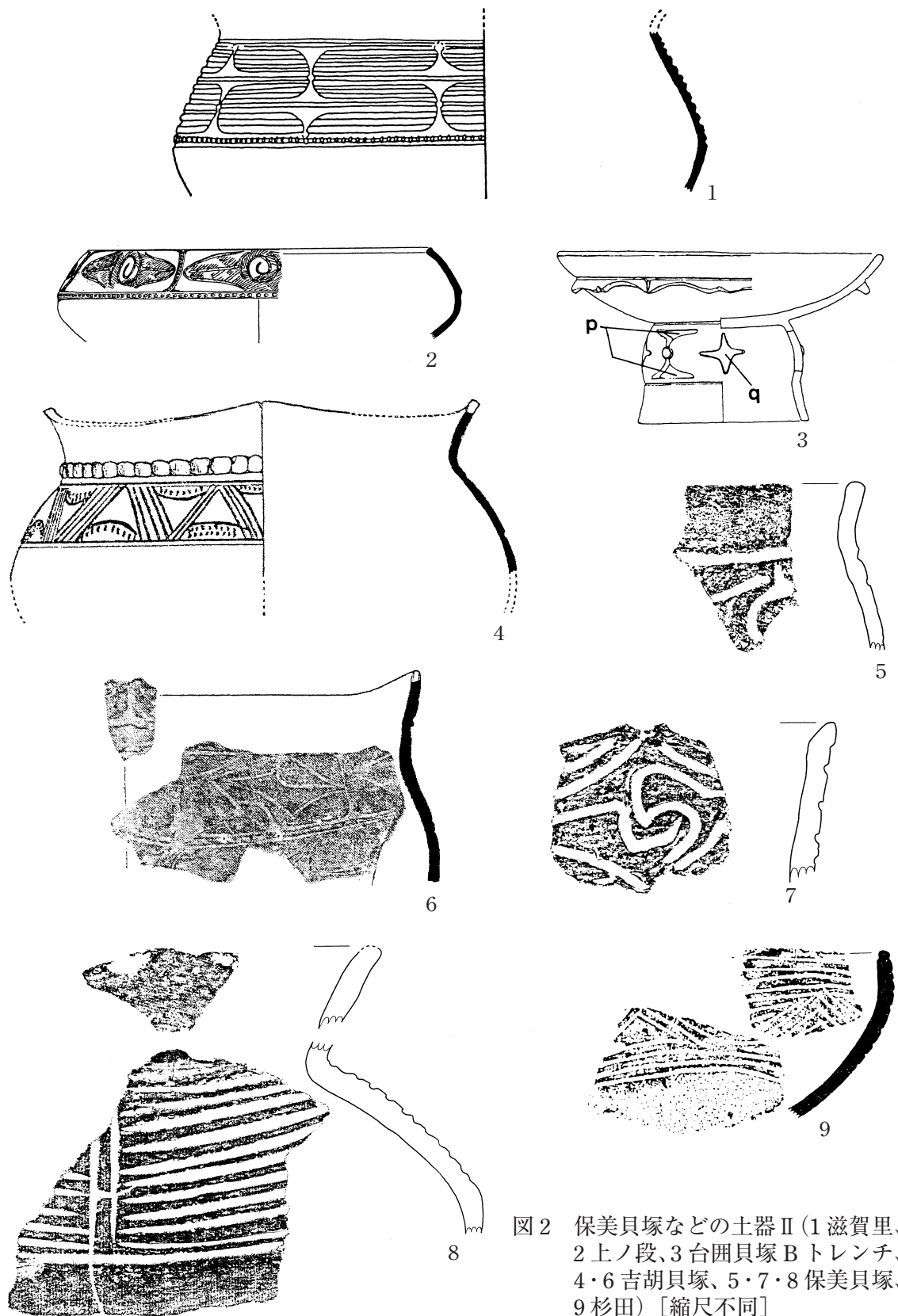


図2 保美貝塚などの土器Ⅱ(1 滋賀里、
2 上ノ段、3 台圃貝塚B トレンチ、
4・6 吉胡貝塚、5・7・8 保美貝塚、
9 杉田) [縮尺不同]

For the Understanding of Potteries from Hobi Shell Mound

OTSUKA Tatsuro

The purpose of this article is to consider the significance of potteries with Kashiwara-type patterns found from Hobi Shell Mound, Aichi Prefecture. Three points are explained :

- (1) The pattern structure of potteries with Kashiwara-type patterns from Hobi Shell Mound is very similar to that of Angyo 3 a-type of the Final Jomon period.
- (2) Potteries with Kashiwara-type patterns from Hobi Shell Mound are dated to the Final Jomon period.
- (3) Pottery with Kashiwara-type patterns is the typical fine decorated vessel of the Final Jomon period in Tokai area.

傾いた壺

——高蔵遺跡 D 地点出土の壺形土器——

黒澤 浩

1. はじめに

近年、考古学においても技術を巡る議論が盛んになってきた。特に、石器研究では、A. ルロワ・グーランの「動作連鎖」概念を受けながら、技術を身体技法（＝動作）として捉え、そうした人の動作が社会的・文化的に選択されたものと考えた立場からの研究が目立つ（西秋 1998・2000、山中 2007・2009）。これまで、技術研究の多くが、型式学的方法に回収されてきたことを思えば、新たな視点の導入がどのように展開していくか期待させるものがある（黒沢 2013）。

しかし、残念ながらこうした研究は石器が中心であり、土器に関しては端緒にもついでいない状況と言えよう。人類学の分野では、物質文化研究にシェーン・オペラトワール分析が導入されているが（後藤 2012）、製作者が見える人類学と、製作者が見えない考古学とでは、方法上の接点を見出すのは難しいかもしれない。

では、土器研究のこうした方向性は、不可能とは言わないまでも、あり得ないほどに困難なものなのであろうか。確かに決して簡単にはいかないが、突破口はあるに違いない。今回は、その突破口を探すことを試みてみたい。

南山大学人類学博物館が所蔵する高蔵遺跡出土資料の中に、1点の壺形土器（以下壺）がある。この土器は、一見何の変哲もない土器に見えるが、通常の土器と異なる

点がある。それはこの土器が傾いていることである。

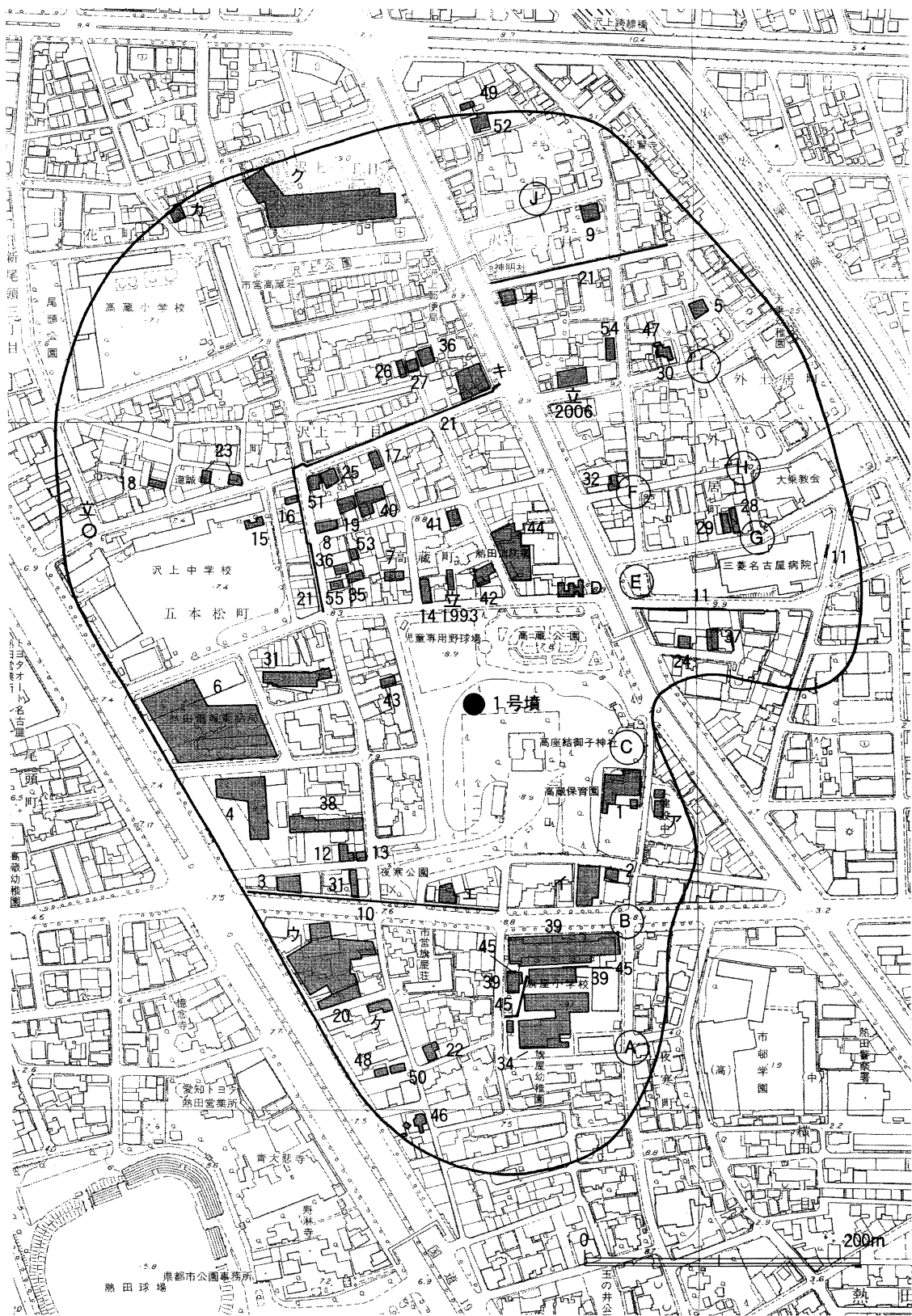
本稿は、この傾いた壺を考察することによって、土器製作と製作者の行動やそれが実行される社会との間に、どのような接点を見出さるか、その可能性について論じてみたいと思う。

2. 高蔵遺跡（第1図）

(1) 南山大学による発掘調査

高蔵遺跡は愛知県名古屋市熱田区に所在する縄文時代から中世にいたる大規模な遺跡の一つである。古くは明治 41（1908）年に、道路工事の際に出土した遺物を、地元の鍵谷徳三郎が報告したことで全国的に知られるようになった（鍵谷 1908）。当時は、東京本郷弥生町で見つかった、いわゆる「弥生式土器」の帰属が定まっておらず、高蔵遺跡（このころは高倉と表記）の事例が弥生式土器と石器・骨角器の共伴事例として報告されたため、弥生式土器が石器時代に帰属する土器であるという説の根拠となった。

その後、今日に至るまで、名古屋市教育委員会による発掘調査を中心に、実に 60 回以上もの発掘調査がなされてきた。それによって、現在は宅地化しているにもかかわらず、遺跡の旧地形や縄文時代から中世以降に至る遺跡の変遷の概要が明らかにされている（石黒 2011）。



第1図 高蔵遺跡の発掘地点 (石黒 2011 年より)

さて、本稿で取り扱う土器は、南山大学が発掘したものである。南山大学では1953（昭和28）年3月の予備調査以降、同年4月の第1次調査、1956（昭和31）年9月～10月にかけての第2次調査、そして1985（昭和60）年の夜寒町地点の調査（重松・大江・近藤編1988）と、3回にわたって発掘調査を実施してきた。このうち、第1次・第2次調査については遺物のみの報告となっていたが、夜寒町地点の調査では弥生前期の環濠と弥生後期の方形周溝墓を検出し、大きな成果を挙げた。

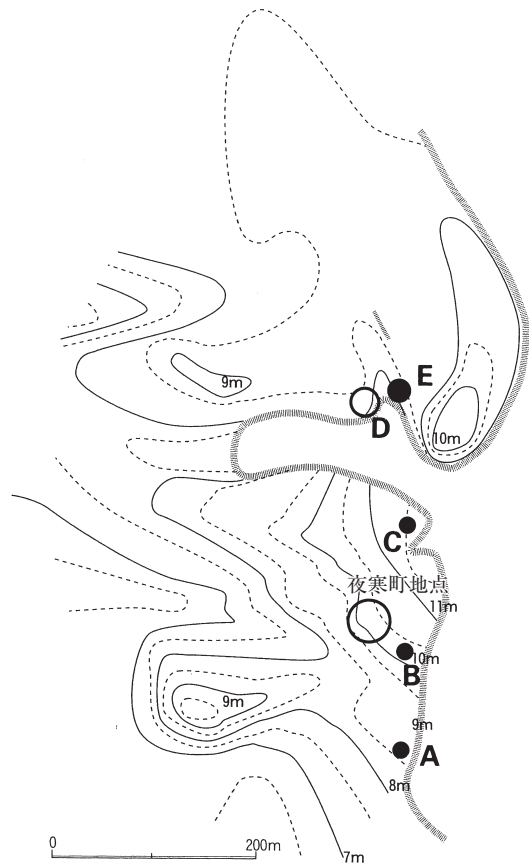
(2) 高蔵遺跡 D 地点の調査

本稿で扱う土器は第2次調査において出土したものである。発掘地点はD地点とされる場所で、高座結御子神社の北側、現在の熱田消防署の東側に隣接したところである。高蔵遺跡のほぼ中央に東から嵌入する谷の北側にあたる（第2図）。

このときの調査の概要は、報告書刊行時点では明らかではなく、「現在、南山大学には遺構に関する資料が残されていない」とされていた（伊藤編1985）。そして、遺物につけられていたラベルから判断して、この時の調査では溝状遺構を発掘したことがわかる。発掘区はA区からJ区に分けられていたが、G～J区は溝状遺構の外側で遺物量も少なく、F区までの遺物が報告されている。

次に、それぞれの発掘区の層位を示しておこう。

A区は「純貝層と最下層溝底に区分されただけ」とされているが、遺物の記載では最上層に混土貝層の記述がある。B区は、「第1層から第6層純貝層まで6層の遺物



第2図 高蔵遺跡の旧地形とD地点・夜寒町地点の位置（石黒2011に加筆）

が認められる。最下層溝底と記されるラベルは、おそらく第7層のことと考えられる」とされているが、出土遺物は第1・第2中間層、第2層純貝層、第3層黒土層、第4層混土貝層、第6層純貝層、最下層に区分されている。

C区は、「第1層から第9層まで記載があるが、第7・8層は、遺物の出土がない」とされる。遺物の記載では、第1層混土貝層、第2層混土貝層、第3層混土貝層、第4層混土貝層、第5層に区分されている。

D区は「第1層から第11層溝底まですべてに遺物が出土しており、10地区の中でも遺物量が最も多い」区である。遺物とし

ては第1層純貝層、第3層、第4層純貝層、第5層ニナ層、第6層純貝層、第11層の各層出土のものが掲載されている。

E区は「第1層から第12層までであるが、第7層、第9～11層は遺物がない」という。第1層、第3層ニナ層、第4層純貝層、第5層混貝土層、第5・第6層中間層、第8層純貝層に分けられている。

F区は「第1層から第10層までのすべてに遺物の出土がみられる」区であり、第2層混土貝層、第3層混土貝層、第4層純貝層、第5層混土貝層、第6層純貝層のものが報告されている。

各層と土器型式の対比は表1に示した(表1)。

この報告からわかることは、高蔵遺跡D地点は、高蔵遺跡の調査としては数少ない層位的な発掘調査の事例であるということである。表1にみるように、層位と土器型式の対応関係には矛盾がない。しかし、遺構の平面図と土層断面図が示されていない

ことから、資料的な価値を著しく減じるものになってしまったのは残念なことであった。

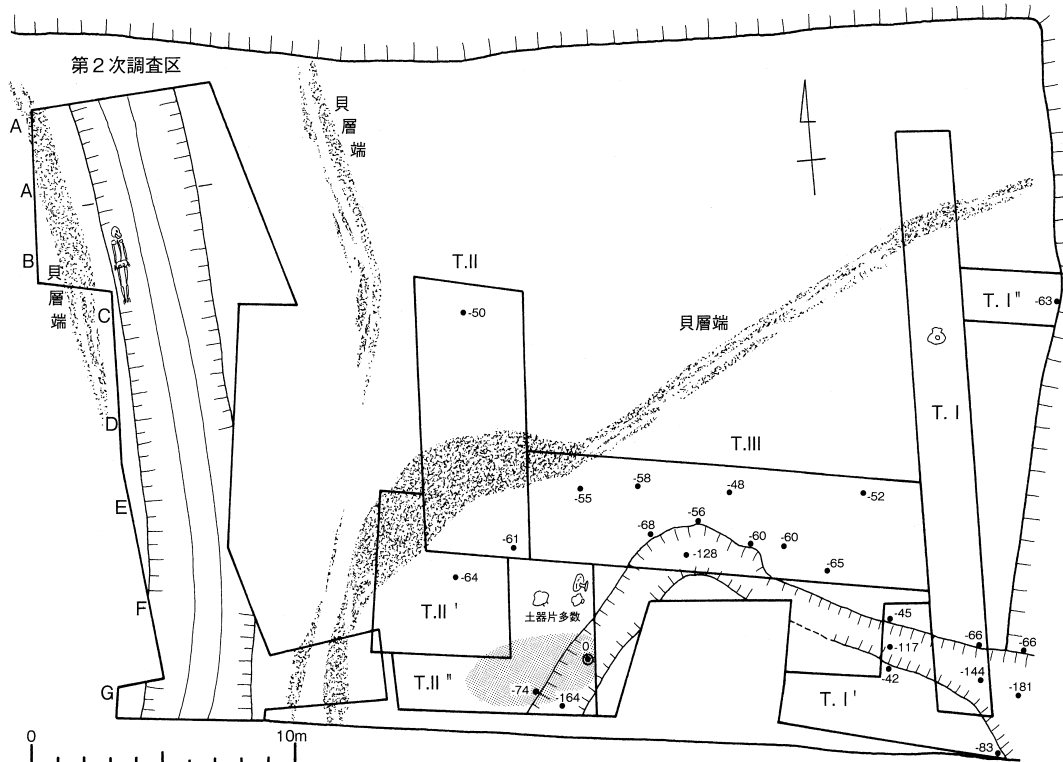
だが、報告から22年経った2007年、高蔵遺跡D地点の図が公表された(第3図)(安藤・松原・伊藤2007)。

それによると第2次調査の地点は第1次調査地点に隣接しており、溝とされていたのは、南北に延びる溝状遺構のことである。この溝状遺構は下端で幅4～50cm、上端幅2m弱、深さ1.7m～2mほどの「逆梯形」をなしているとされているが、断面図をみればV字溝であることは間違いない(第4図)。発掘区は溝の北側から南側に向かってA～Gとされており、各区は基本的には同一遺構であることがわかる。また、周辺には貝層の堆積があり、その一部が溝状遺構内に流れ込んだものであろう。

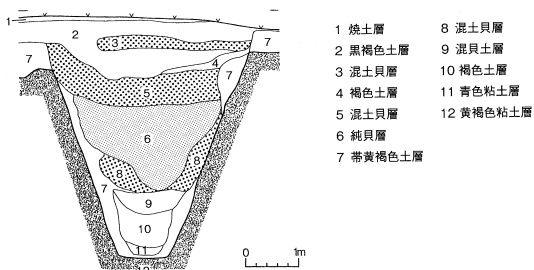
石黒立人は、この溝状遺構について「……これまで「V字濠」の発見報告がいくつかあり、2条のV字断面濠が囲んでいた可能

表1 D地点各区の層位と土器型式の対応関係

時期	型式	A区	B区	C区	D区	E区	F区	
後期	混在		第1層	第1層混土貝層				
	尾張Ⅶ様式		第1・第2中間層	第2層混土貝層	第1層純貝層 第3層	第1層		
			第2層純貝層	第3層混土貝層		第3層ニナ層	第2層混土貝層	
			第3層黒土層	第4層混土貝層		第4層純貝層	第4層純貝層	第3層混土貝層
	山中式		第4層混土貝層	第5層	第5層ニナ層	第5層混貝土層	第4層純貝層	
					第6層純貝層	第5・第6層中間層	第5層混土貝層	
							第6層純貝層	
	中期	高蔵式	混土貝層					
			純貝層上部	第6層純貝層				
中期後半以前		最下層	最下層					
						第8層純貝層		
					第11層			



第3図 高蔵遺跡 D 地点発掘区平面図 (安藤・松原・伊藤 2007)



第4図 第2次調査 A 区南壁土層断面図 (安藤・松原・伊藤 2007)

性が高い」と述べており (石黒 2011)、明言はしていないが環濠である可能性を示唆している。筆者も断面形状からみて環濠である可能性は高いものと考えている。

(3) 壺の出土地点と時期

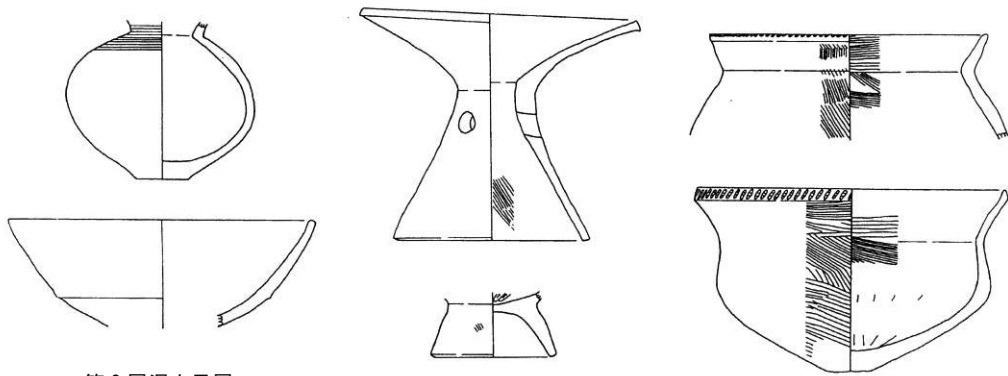
さて、本稿で取り上げる壺の出土地点と時期を確認しておきたい (第5図)。

本資料は、報告書によれば F 区第3 混土貝層の出土とされる。共伴した土器はパレス壺1点、台付甕5点 (胴上半~口縁部3点、台部2点)、高杯1点、ミニチュア1点である。このうちパレス壺および高杯は「尾張Ⅶ-2 様式」(加納・石黒編 2002) の特徴を有している。また、下層にあたる第4 層純貝層では山中式の高杯が出土しており、上層にあたる第2 層混土貝層では第3 混土貝層出土土器とほぼ同時期の土器を出土している¹⁾ ことも、傍証となろう。

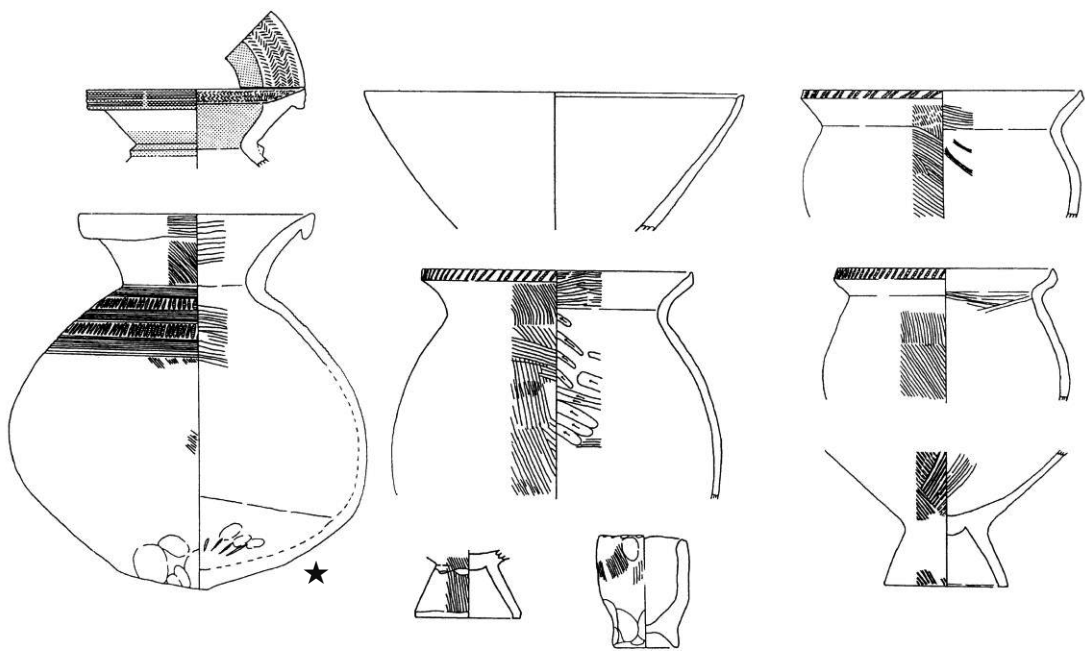
3. 壺の記載 (第6図)

(1) 形態

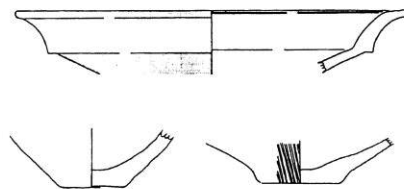
本資料は、太頸の広口壺とされる器形である。高さ 26.6cm、口縁径 14.8cm、胴部最大径 24.7cm、底径 6.8cm を測る。中型



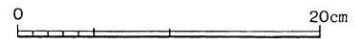
第2層混土貝層



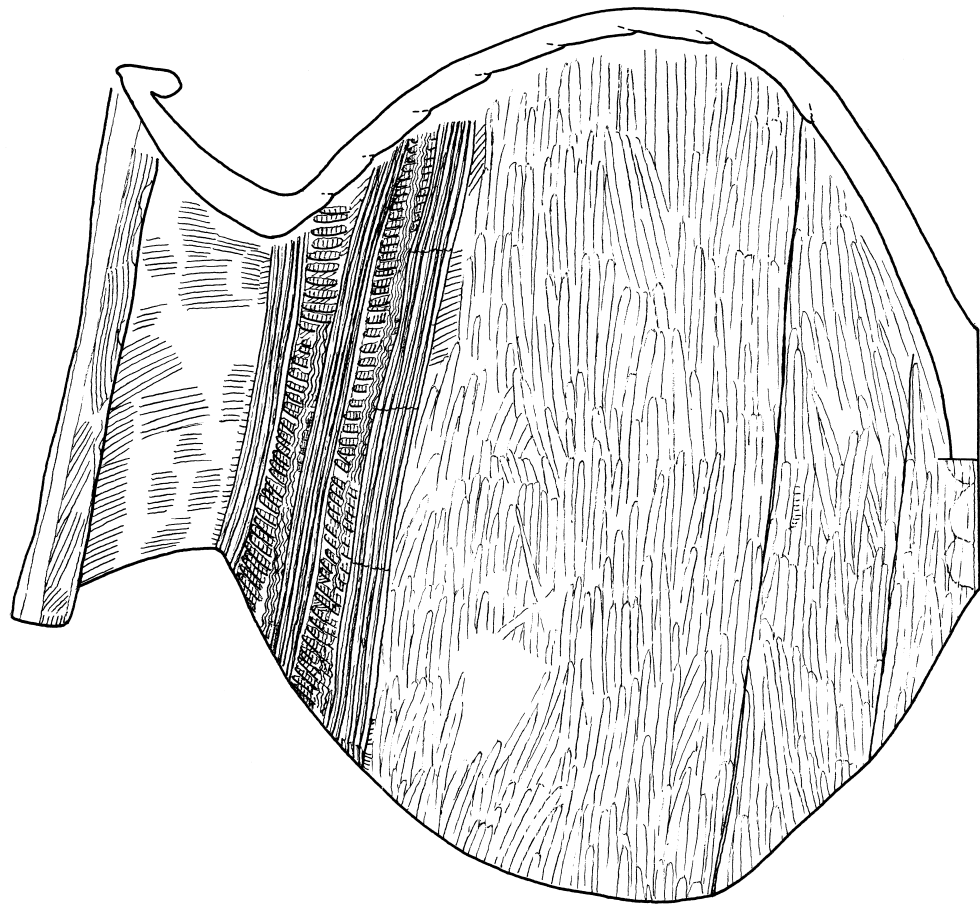
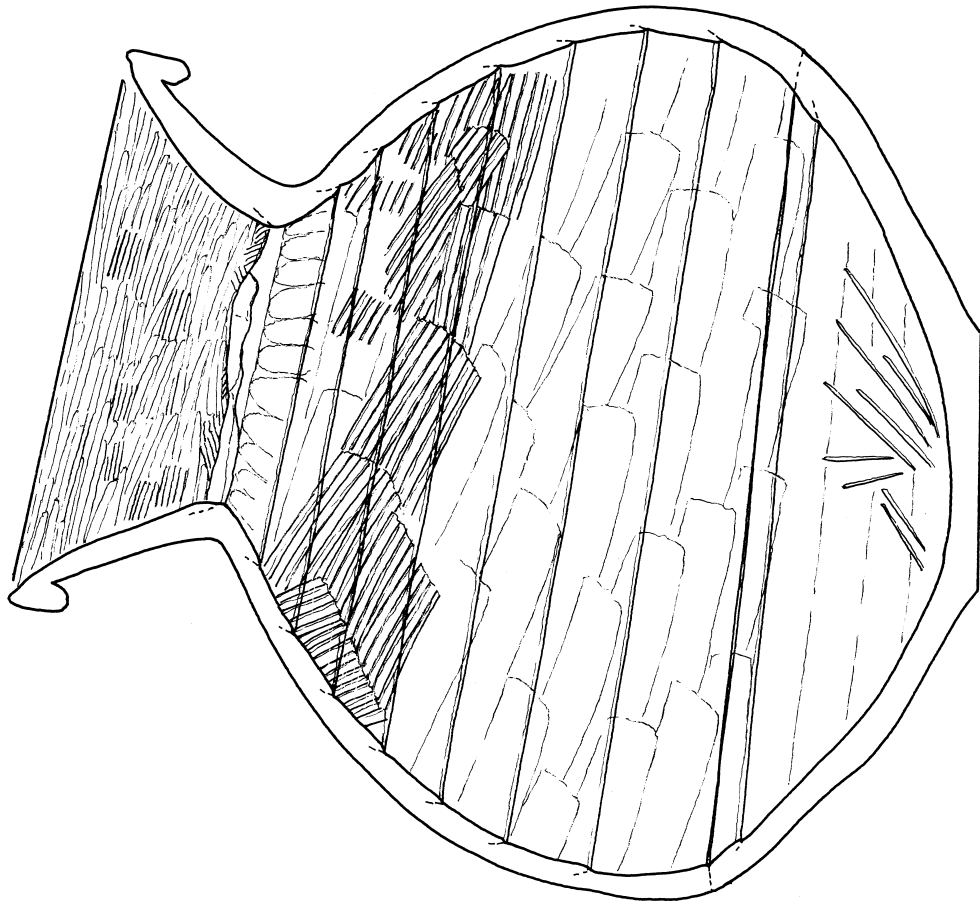
第3層混土貝層



第4層純貝層



第5図 F区出土土器の層位的関係(★が「傾いた壺」 実測図は報告書(伊藤編 1985)より)



0 10 cm

第6図 「傾いた壺」実測図

の壺と言えよう。

器形は底部から大きく外に開きながら立ち上がり、5~7cmほどのところでやや屈曲気味に内傾に転じる。ゆるく丸味を帯びながら頸部へと向かい、すぼまっていく。頸部では強く屈曲し、外販しながら口縁部に続く。口縁部は端部外側に粘土帯を1帯貼り付けて二重口縁としている。口縁部内面の端部は狭い平坦面を形成し、その上端はわずかに隆起して、その直下に溝状のくぼみを生じて1周している。形態上の特徴は言うまでもなく傾いていることで、口縁部が底部に対して20°傾いている。

(2) 製作技術

成形は粘土紐の輪積みであり、巻き上げではない。胴部中位から上半(頸部)にかけて、内面には7段の粘土紐の接合痕が残っており、その幅は1帯が2cmである。底部から胴部下半では接合痕が観察できない。頸部の屈曲部内面では接合痕が見られず、指による押捺痕があり、そのことからこの屈曲が新たな粘土紐を接合させたのではなく、手指によって粘土を伸ばしながら屈曲させたものと見ることができる。

次に整形について、外面と内面とに分けて述べる。

外面ではまず底部をナデ整形しているが、凹凸が残っていることから指でナデているようだ。胴部は底部付近から頸部上端まで全体をハケ整形し、その後、頸部と胴部上半(肩部)の文様帯となる部分以外を丁寧に研磨している。研磨方向は概ね、時計回りで、下から上に向かっている。口縁部は二重口縁を形成する粘土帯の下にハケメが入り込んでいることから、ハケ整形後

に粘土紐を貼付したものである。二重口縁の上は、横方向にハケ整形された後、ヨコナデされている。

内面は、まず底部から胴部下半の部分では横方向のナデが見られ、その後に縦方向の工具痕らしき傷が入るが、どのような技法かはわからない。胴部下半の屈曲部分で一直線に割れており、そこが粘土紐の接ぎ目であることがわかる。その割れの直下に粘土紐が1条残っている。

胴部中位から頸部にかけては、全体にナデ整形をしている。このナデ整形は工具幅で細密な条線が残るもので、方向は逆時計回りに下から上に向かっている。このナデ整形の後に、胴部上半では頸部の屈曲部分から下に4~5段目の接合痕付近まで粗い条線が残るハケメが施される。方向は逆時計回りで下から上に向かう。

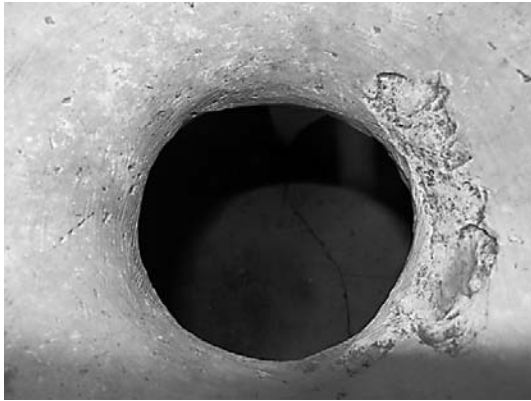
頸部には先述のように、指による押捺痕が残る。口縁部は屈曲部付近で縦および斜め方向のハケメが見られ、口縁部内面では横方向にハケ整形がなされた後、横方向に丁寧な研磨が施されている。このハケメは外面のハケメと似ているが、胴部上半の粗いハケメとは原体が異なる。

頸部の屈曲部付近では薄く被せた粘土のヘリのような段差が生じており、また、口縁部内面に薄く剥落した部分があることから、スリップを施している可能性がある。剥落部分の色調は白っぽく、残存している部分とは色調が異なっている(第7図)。

(3) 文様

文様帯は胴部上半の肩部のみで、口縁部には文様帯をもたない。

肩部の文様帯は3帯の櫛描直線文とその



第7図 口縁部内面の剥落

間に挿入されるハケ原体による列点状の刻目で構成される。櫛描直線文は6本歯の工具で、時計回りに描かれる。3帯とも起点終点の位置が同じで、縦に並んでいる（第8図）。また、直線のつなぎ目は3帯とも1カ所であることから、回転させての施文であると言える。ただし、最下段のみ、およそ5cm間隔で押し引き状に工具が止められているが、その部分に現れる工具痕が三日月形を成していることから、櫛描文の原体は細い竹管状のものを束ねていたのかもしれない。列点状の刻目はハケ原体の小口部を使っている。櫛描文とは明らかに違う工具であり、胴部外面や頸部屈曲部内面のハケメとよく似ている。列点状の刻目の後、波動の小さい櫛描波状文が施文される。これは1985年報告の図には描かれていない。ただし、この波状文については工具の様態や施文方向については観察しきれない。列点中の条線と重なっていて見えにくく、また施文も弱いためである。

施文順序は上から櫛描直線文→列点状刻目→櫛描直線文→列点状刻目→櫛描直線文となっており、同一工具で同じ文様をまとめて描くのではない。この施文順序は高蔵遺跡の他のパレス壺にも観察される。



第8図 櫛描文の起点と終点

胴部の研磨との関係を見ると、ミガキの一部が櫛描文の下に入り込んでいることから、文様施文に先立って研磨されていることがわかる。しかし、基本的には文様帯部分には研磨は及んでおらず、研磨の時点ですでに文様帯の描かれる幅が決定されていることになる。こうした点もパレス壺に共通している。

(4) 焼成・色調

焼成は良好である。

色調は内外面で異なっている。外面は白っぽい乳褐色（淡いベージュ）を基調とし、口縁から底部の一部が赤変している。黒斑は胴部中位から上半にかけて部分的に残る。この黒斑は焼成時のものである。

内面は、胴部では暗灰色（濃いグレー）、口縁部は赤褐色（オレンジ色）で胴部外面の赤変部分と同じ色をしている。

4. 壺が傾いている理由

(1) 失敗品ではないこと

次に、この壺が傾いている理由について考えてみたい。

通常、このような変形が生じている場合

には製作時の失敗である可能性がまず考えられるだろう。しかし、以下の3つの理由から、この壺を失敗品と見なすことはできない。

① 精製品であること

胴部および口縁部内面が、丁寧に研磨されている。製作途上でこの変形に気づいたとしたら、ここまで丁寧に仕上げるか疑問である。

② 文様に崩れがないこと

文様は、頸部の屈曲を基準にしているようであり、3帯の直線文はいずれも相互に平行に描かれている。

③ 修正されていないこと

一般に遺跡出土土器には稚拙なものであっても、失敗品は見られない。それは製作途上での変形や歪みは、修正もしくは作り直しをするからである。遺跡で認定される失敗品は、焼成時の失敗品しかない。

これらのことから、この壺の製作者は精製土器を作り得るだけの技量の持ち主であり、仮に変形・歪みが生じたならば、それを修正することは十分にできたであろう。それにもかかわらず、この土器の傾きは修正されていない。そうだとすれば、この壺の傾きは意図されたものと考えられる。

(2) 技術的な理由

この傾きを技術的な観点から検証してみよう。そのとき着目すべきは胴部下半にある一直線の割れ口ラインである。先にも述べたように、この割れが接合部であることは明らかである。そこで、今、この割れ口ラインで土器を上下に分割して考えてみよう(第9図)。

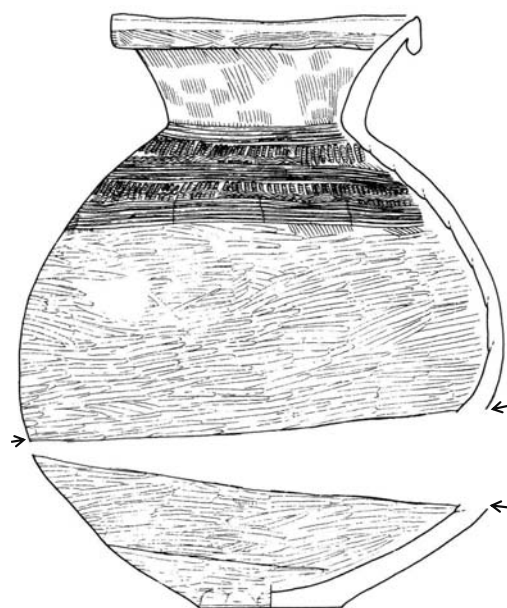
上半部下端の割れ口ラインは、実測図左

側が若干下に下がっているが、このアンバランスは上から7段目の粘土紐よりも下(つまり8段目に当たる部分)が、図の左側では幅3cmであるのに対し、右側では幅2cmしかないことに起因する。ここで生じる傾きは、水平面に置いたとき6°となる。

一方、下半部上端の割れ口ラインの傾斜は底部に対して10°となる。ただし、この傾斜がどのような成形によって作り出されたかは接合痕が観察できないためにわからない。いずれにしろ、成形時点では下半部の割れ口ラインは10°の傾斜をもち、上半部の割れ口ラインは6°の傾斜を持っていることになり、この2つの傾斜角度にさらに別な若干の歪みを加えて、最終的に20°の傾斜が生じたものと考えられる。

しかし、このように考えると説明できないことが2つ出てくる。

1つは文様が傾斜に合うのではなく、頸部の屈曲を基準としている点である。先述



第9図 上下の分割(→←の部分割れ口ライン)

のように、この文様は回転運動を利用して施文されていることは明らかなので、櫛描文の軌道は水平に取られるはずであり、土器の傾きに合わせて文様が傾くことはない。

もう一つは、胴部上半内面の接合痕である。接合痕も土器の傾斜に合わせて傾いているが、粘土紐相互の関係は平行している。つまり上半部は傾きを意識しているわけではなく、真っ直ぐに作られているということになる。

以上のことを合理的に説明しようとするならば、この壺は胴部の割れ口ラインを境に上下分割して製作され、その後に接合されたものとするのが最も理に適っている。そのときには、下半部も上半部もそれぞれの端部がすでに傾斜をつけて作られている。実測図では、左側の胴部下半にやや歪みが生じているのが見て取れるが、上述のように考えるならば、上半部と下半部の接合面の径の微妙な誤差によって生じたものと見なせよう。

では、文様施文のタイミングはいつか。それは上下を接合する前の段階と考えなければならない。その場合、仮に回転台を使用したとすれば、底部がない筒抜けの状態では施文されたということになるが、それはあり得ることだろうか。

筆者によるカンボジアの土器作り村の調査では、次のような事例が観察された。筆者の調査地であるコンポンチュナン州トラペアン・スバウ *Trapeang Sbov* 村の土器製作者の1人は、回転台を使い、正に櫛描文を施文するのだが、施文時点では底部のない筒抜け状態であった。こうした事例を参照すれば、この壺についても分割成形され

た可能性を排除することはできない。

なお、上下を接合した後の内面のナデ、外面の研磨ともに傾斜の影響をあまり感じさせないのは、これらの整形が土器を置いた状態でなされたのではなく、抱えた状態でなされたからであろう。ここに土器製作者の動作の一端を垣間見ることができる。

(3) 機能的な理由

意図的に壺を傾かせて作るということには、何らかの機能上のメリットを期待していると考えられる。

まず、この壺の機能だが、焼成後のススの付着は認められないから、煮沸に使われたものではない。また、供膳具とはいえないので、可能性としては二つ残る。一つは貯蔵用の容器である可能性、もう一つは儀器あるいはオブジェである可能性である。後者については出土状況等からは検証できないので、ここでは貯蔵用容器としての可能性を念頭に議論を進めたい。

仮に、内容物が液体であるとしたら、土器の傾斜は何か有利に働くようなことがあり得るだろうか。液体の場合、貯蔵すると同時に、その液体を使う時に、別な容器等に移し替える必要が生じるであろう。そのときの動作としては、容器全体を傾けるであろうから、口縁部が傾斜していることに特段のメリットはないように思える。また、口縁部の形も、頸部から口縁部までの面が長く、液体が幅広く伸びながら流れ出るため、狙いを定めにくい。以上のことから、形態的に液体には不向きといえる。

それでは固体と考えた場合はどうだろうか。固体といっても、入口にあたる口縁部・頸部が比較的小さく、貯蔵空間である



第10図 70 cmの高さで手を入れる



第11図 床に置いて手を入れる

胴部が大きい器形は、土や砂のような顆粒、もしくはモミなどの粒状のものが想定しやすい。そうであったとすると、土器の傾きはどのような働きをするのであろうか。ここでは2つのケースで考えてみよう。

1つは壺の中に顆粒状もしくは粒状のものを入れるケースである。この動作の場合、口縁部を手前側、つまり行為者側に持ってくるから、行為者と口が正面に向き合うことになる。土器と人とのこの位置関係では、顆粒状や粒状のものを入れるにはやや作業がしにくくなるであろう。

次に取り出す時を想定してみる。動作としては、壺全体を傾けて流し出す方法と、手の中に入れて一握りつかみ出す方法とが考えられるが、前者は液体の場合と同じなので、ここでは後者について考えてみる。つまり、土器から何かをつかみだすとき、この壺の傾斜はこの動作をしやすいかどうか、ということである。これについては実験を試みてみた。

まず、70cmの高さのテーブルの上に、本

資料と同じ高蔵遺跡出土のパレス壺を置き、手を入れてみた。被験者は身長170cm弱の筆者（被験者A）と、身長148cmの博物館スタッフ（女性、被験者B）である²⁾。

このときには土器を上から見下ろす状態になるため、筆者の場合、目線が口縁部正面を向いているように感じられたが、実際の動作では本資料でもパレス壺でも大差はなかった。同じことを身長173cmの大学院生（男性、被験者C）でやってみても、感想は同じであった。

一方、被験者Bの場合には、パレス壺に手を入れる時にはやや肘を挙げ加減にしなければならないため、やややりにくいとの感想を得た。それに対して、傾いた壺の場合には肘を挙げることなく、スムーズに手を入れることができたという（第10図）。

この結果からだけからいえば、被験者Bにとっては傾いた壺の方が、内容物をつかみ出すという動作はやりやすいということになる。しかし、弥生時代・古墳時代に、高さ70cmのテーブル状の台は存在してい

ない³⁾。したがって、この想定は状況として無理がある。

そこで次に、壺を床において、同様に手を入れて見たが、この場合には被験者Bも被験者Cも、そして当然ながら被験者Aである筆者も、いずれの土器についても変わりはなかった(第11図)。つまり、床に置いている限りでは、口縁部が傾いていようが、水平であろうが、内容物をつかみ取ろうという動作には差がないということである。

以上のことから、傾いた壺には機能的なメリットはそれほどないものと考えて良い。

(4) 「傾いた壺」の位相

これまでの考察からいっても、壺を傾けて作る明確な理由を見出すことはできなかった。ここで、状況をもう一度整理してみると以下のようになる。

- ① この壺の傾斜は意図して作り出されたものである
 - ② 機能上のメリットは見いだせない
- この2点がここまで検討してきた結果である。さらに、これに次の点も加えられる。
- ③ これだけの傾斜を持った壺は、この土器1点である
 - ④ V字溝中に廃棄されており、特別な扱いは受けていない
 - ⑤ 器形・整形・文様にパレス壺との共通性が見られるが、赤彩という要件を欠いている点でパレス壺とは異なる

こうした点から浮かび上がってくるのは、この壺が出土状況からみて普通の土器であると同時に、1点しかないという点において、きわめてイレギュラーな作品と言

えることである。

こうした点を踏まえ、ここでは一つの仮説として、この土器が試作品として製作されたのではないかと考えてみたい。

この場合のシナリオはこうである。精製土器を作り得るだけの技量をもった製作者が、傾いた壺を製作したが、傾けて作るだけの労力をかけながら、機能面ではほとんどメリットがないことが判明した。そのため、この土器を製作して以降、傾いた壺を製作することはなかった、というものである。傾いた壺を製作した動機は、傾けた方が機能的に有利になることが想定されたからであろうが、結局この試みは上手くいかなかったのである。そのため、最後は溝の中に他の土器やゴミなどと共に廃棄されることになったのであろう。

また、この土器は⑤で示したようにパレス壺との共通点が多い。そのことから、壺を傾けることで機能上のメリットが認められたならば、パレス壺として製作された可能性も考えられよう。そして、この壺がパレス壺と共通点を持ちながらも、赤彩という最も重要な要件を欠いていることは、それ自体が試作品であることの傍証たりえるものといえよう。

おわりに

今回、たった1点の土器の観察と考察によって、かなり大胆な解釈を試みた。考古学では製作者を見ることはできないから、残された技術の痕跡を読み解いて、製作者の姿を再構成しなければならない。こうした試みは、おそらく、ノーマルな資料よりも、本稿で扱ったようなイレギュラーな資料のほうが、より良い結果を導き出せるよ

うに思える。

弥生時代、古墳時代の土器研究、特に編年研究では、これまで該当する時代の土器全体を分類して、系統立てることで、年代的枠組みが構築できるものと考えてきた。しかし、それは編年研究の方法としてはムダが多いと言わざるを得ない。年代的に系統立てるのであれば、時間軸に沿って系統をたどれる器種に分析対象を限るべきであろう。なぜならば、本稿で示したように、土器製作の在り様は、すべてが系統と秩序を持ってなされているわけではなく、日々の作業の中での試行錯誤の繰り返しだと考えられるからである。むしろ、すべてを系統立てようという試みは、過去における人のモノづくりの営為を、時間の中に埋もれさせてしまうことにしかない。

本稿で示したのはあくまでも仮説であり、観察から得られるデータを最もよく説明することを目指したものである。つまり、土器が傾いているという「驚くべき事実」を説明するために、それが意図的なものであり、かつ機能的なメリットはないという観察結果から、この土器が試作品ではないのか、という仮説的な結論に至ったということである⁹⁾。そしてこの仮説自体は、今後検証されていかなければならない。

本稿を書くに当たり、博物館業務の合間を縫って沖田朋絵さんに協力していただいた。被験者 B に感謝したい。

註

- 1) ただし、第2層混貝土層の高杯は尾張 V-1 様式のものである。
- 2) いわゆる渡来系弥生人の平均身長は男

性 164cm、女性 150cm、縄文系の場合には男性 158cm、女性 147cm であったとされる。そうすると、被験者 B の身長は渡来系にも縄文系にも該当することになる。

<http://www.kahaku.go.jp/special/past/japanese/ipix/5/5-08.html>

- 3) 弥生時代には大型脚付木製品と呼ばれるテーブル状の木製品が知られ、長友朋子は形態や使用痕の状況から「片付けるために物や文書や書物を置いたり、座ったときにもたれるための儿とよばれる家具、それから食器をおく案、食物を切るための俎板がある」としている（長友 2013）。しかし、これらは高さが 8~25 センチ程度であり、ここでの想定よりもはるかに低い。また、その性格からいっても貯蔵用の壺を置いておくものではない。
- 4) この方法は論理学者の C. パースによって提案されたアブダクション（リトロダクション）と呼ばれる推論法である（米盛 2007）。

参考文献

- 安藤義弘・松原隆治・伊藤秋男 2007 「中山英司と愛知の遺跡」『伊藤秋男先生古希記念考古学論文集』伊藤秋男先生古希記念考古学論文集刊行会
- 石黒立人 2011 「高蔵遺跡」近現代史序論『南山大学人類学博物館所蔵考古資料の研究 高蔵遺跡の研究 / 大須二子山古墳と地域史の研究』南山大学人類学博物館オープンリサーチセンター研究報告第 4 冊、南山大学人類学博物館
- 伊藤秋男編 1985 『高蔵貝塚Ⅱ—1956 年 D 地

- 点第2次発掘調査』人類学博物館紀要第7号、南山大学人類学博物館
- 鍵谷徳三郎 1908「尾張熱田高倉貝塚実査」『考古界』第7巻第2号、考古学会
- 加納俊介・石黒立人編 2002『弥生土器の様式と編年 東海編』木耳社
- 黒沢浩 2013「型式・型式学と技術学的研究—動作連鎖概念をめぐる—」『みずほ別冊 弥生研究の群像—七田忠昭・森岡秀人・松本岩雄・深澤芳樹さん還暦記念—』大和弥生文化の会
- 後藤明 2012「技術人類学の画期としての1993年—フランス技術人類学のシェーン・オペラトワール論再考」『文化人類学』77巻1号、日本文化人類学会
- 重松和男・大江達子・近藤恵編 1988『高蔵貝塚Ⅲ—1985年度夜寒地区発掘調査』人類学博物館紀要第10号、南山大学人類学博物館
- 長友朋子 2013『弥生時代土器生産の展開』六一書房
- 西秋良宏 1998「序章 解説」『石器研究入門』クバプロ
- 西秋良宏 2000「シェーン・オペラトワール」『用語解説 現代考古学の方法と理論Ⅱ』同成社
- 山中一郎 2007「「動作連鎖」の概念で観る考古資料」『古代文化』58-4、古代学協会
- 山中一郎 2009「動作連鎖の概念を巡って」『日本考古学協会 2009年度山形大会 研究発表資料集』日本考古学協会 2009年度山形大会実行委員会
- 米盛裕二 2007『アブダクション 仮説と発見の論理』勁草書房

A Leaning Jar: A Jar-Shaped Pottery from D-Point of Takakura Remains

KUROSAWA Hiroshi

This paper examines a Late Yayoi jar excavated from D-point of Takakura remains, Nagoya City. This item, seemingly an ordinary jar like others, has a distinguishing characteristic that the entire figure leans 20 degrees. Technological observation shows that the leaning clearly derives not from an accident, but from some intension.

Why, then, did the potter make such a leaning jar instead of straight one? From the functional point of view, one may suppose that the figure was related to the movement such as grasping and picking up the contents from the jar, but this seems not the case ; we found that there is no clear advantage of the leaning figure for such purposes.

The experimental research provides a hypothesis that this item was made as a trial piece for easy-picking. We may show supporting evidences for this supposition as well. The jar is the sole piece of leaning vessel from the same remains, and the item lacks the important characteristic as palace-style jar, that is, the red painting, even though its pattern and formation are common with it.

This leaning jar may imply that potters of the Yayoi period tried to create new potteries in their daily workings. This paper then provides a new approach of study, that is, the observation of technology, so that we may focus on one of aspects of the past not fully investigated in previous archaeological researches.

パプアニューギニア・セピック河流域地方の仮面

如法寺慶大

0、はじめに

本稿は、南山大学人類学博物館が所蔵するパプアニューギニア・セピック河流域地方の仮面について報告するものである。本稿にて扱う仮面は、セピック河流域地方のものであり、館における資料分類では「Wooden Mask 人面」と登録されている民族誌資料である。同種と考えられる資料は8個確認することができ、今回はそのうちの4個を取り上げる。

これまで仮面は、その象徴性や社会的機能性など、当該社会における社会的・文化的コンテクストとの関連性のなかで捉えられる一方で、博物館に収集された仮面は異文化表象の対象として語られる傾向にあり、それらの仮面自体が分析の俎上に載せられることは少なかったと考えられる。

筆者は、今回の報告にあたり、仮面をセピック河流域の文化表象として取り上げるだけでなく、モノの背景にある製作者の意識や行為を分析することを試みる。具体的には、仮面を人間の歴史を示す民族誌資料として捉え、そこに刻まれた様々な痕跡の観察を通して、そのバリエーションとともに、製作者の製作工程やその認識のあり方へと考察を広げていくことを考えている¹⁾。そのため、本稿では対象資料の観察とそこからの分析に何よりも重点を置いている。仮面というモノの細部から何を語りうるのか。本稿ではその点を念頭に置きつ

つ議論を進めていく。

1、資料収集の経緯（南山大学人類学博物館所蔵の仮面）

本稿にて取り上げるのは、「Wooden Mask 人面」と登録されたパプアニューギニアのセピック河流域地方の仮面である（資料番号：11-347～11-354）。

セピック河はニューギニアの北東部を流れる河である。その全長は1000mを超え、広大な流域の湿地帯には本流と支流が網目状に広がっており、それぞれの地域に独自の美術様式を伝える少数民族がいくつも点在している。この地方の仮面は、木製だけではなく、籐による編み細工のものや、表面に豚の牙や貝による装飾を施すものなど、その技法と装飾は多様なものといえる。また、顔に身につけるだけではなく、家屋の柱や戦闘用カヌーなど、造形だけではなくとりつける場所や機能性においても多種多様な様相がみられる。本資料は、こうした仮面の1つと考えられ、顔に身につけるようなくぼみがみられないことから、家屋の壁や柱に取り付けられるタイプのものと考えられる。

対象資料の収集には、神言会修道会の宣教師であると同時に民族学者でもあったヘンリー・アウフェンアンガー師が大きく関係しているものと考えられる。師は、1934年のニューギニア高地へのミッションから

約20年近くニューギニアへ滞在していた。その後、南山大学で教鞭をとり、1964年に行われた南山大学の東ニューギニア調査団への参加もしている。師は、こうした滞在期間中に仮面や精霊像、木製皿など、様々な民族資料を収集しており、この仮面も同様に収集されたのではないかと考えられる。ただし、同資料の台帳にそうした内容の記述等がみられないことから断定することはできないだろう。現時点においては、あくまでアウフェンガー師の手によって収集された可能性が高いという指摘にとどめておく。

2、研究の視角

2-1 文化人類学における仮面研究小史

これまで仮面は、その造形がもつ特徴や社会的・文化的に果たされてきた機能性から民族的・美術史的な視点における研究が進められてきたといえる。それらの造形及び機能の点から民族表象とその研究対象として、さらに民族芸術の精華として注目され、各国の博物館・美術館による収集対象であった〔吉田1992:27〕。さらに、こうした民族芸術品としてのインパクトは、ヨーロッパなどの芸術家やその活動に対して一定の影響をもっていたといえる。仮面をはじめとした民族美術の研究は、人類学者よりもむしろ美術史を専門とする博物館・美術館のスタッフの手によって進められてきたとされ、それらの大半は十分な現地調査に基づかない形式的、あるいは伝播論の色彩を残す様式論的な議論が多く唱えられていた〔ibid.:29〕²⁾。当該社会の内的な部分まで入り込むことはない断片的な調査は、仮面研究初期における立ち遅れの原因

の1つであったとする批判も投げかけられている〔ibid.〕。

しかし、一方で仮面を当該社会内におけるコンテクストとの関係性を重視する研究も多く行われている。この動きとしてみられるのが北東リベリアにおける仮面結社について研究したハーリーであり、彼は当該社会内における仮面の役割、政治的機能性について報告している〔Harley 1950〕。構造主義的認識とその方法論を提唱したレヴィ・ストロースも仮面という物質文化に大きな関心を寄せた一人であり、その成果として『仮面の道』を発表している³⁾。この著書において、彼は北西インディアンがもつ仮面を宗教的、政治的、経済的な役割や意味においてのみ理解するのではなく、その造形にみる神話との対比的構造関係のなかで体系的に捉えることを試みている〔レヴィ・ストロース1977〕。また、こうした仮面への構造主義的研究は他の研究者によっても行われ、パプアニューギニアの西セピック地域の仮面に注目したジェルもその一人である。その儀礼的ダンスに注目し、その一連の流れのなかで用いられる仮面をセットとして捉え、システムとして実践されるダンスへの構造的分析が試みられている〔Gell 1985〕。

吉田はこのような仮面研究を概観し、それまでの仮面研究が意味論的・象徴論的な視点に囚われていたと批判するなかで、自身はザンビア共和国のチェワ社会における仮面文化への報告を挙げており、仮面・憑霊・邪術という事象を個別的に象徴的な意味として解釈するのではなく、人々の経験を構築する相互関係的な実践のシステムとして捉えている〔吉田1992〕。また、アフ

リカ社会の仮面文化を分析した佐々木は、これまでの人類学者が行ってきた仮面研究は、当時の当該社会内において時間的にも空間的にも閉ざされた状態で自己完結する傾向にあったと批判し、仮面社会へ通時的な視点を取り入れ、歴史的な経緯をも含めた理解を試みた [佐々木 2000]。

さて、社会的コンテクストとの関係性を重視する視点とは異なる方向からの議論も高まりをみせ、物質性を帯びたモノとしての仮面に注目がなされた。佐々木は、仮面を「一定の質量、質感をもち、人間の五感との間で特有の相互干渉を繰り返すモノ」と捉え、物質性を帯びた存在としての仮面の報告を挙げている [佐々木 2012]。そのなかで、その物質性を構築する社会的文脈に注目し、物質性をめぐる複数の視点を指摘する。また、仮面を動的なモノとして捉えた吉田は、バリ島で行われる仮面舞踊劇に注目する [吉田 2011]。この舞踊劇という芸能に独特の作用をもたらす仮面の物性を指摘したうえで、その文化的コンテクストにおける人と仮面の双方向的で可変的な関係性を明らかにした。

ここまで仮面を対象にした議論とその成果の一部を概観してきた。その初期においては形態や様式への言及がなされ、その後は当該社会との関係性のなかに仮面は捉えられている。さらには、新たに物質文化的解釈の視点も取り入れられるなかで、研究としての方向性は多様なものになっているといえるだろう。

2-2 オセアニアにおける仮面

パプアニューギニアを含むメラネシア地域において非常に発達した仮面文化は、オ

セアニア地域全体において発達しているかというところではない。ミクロネシアとポリネシアにおいて、ミクロネシアのモートロック諸島に確認されるのみで、その他の地域には存在していない。メラネシアにおいて有名な仮面文化は、セピック河流域、パプア湾付近、ニューアイルランド島のマランガン、ニューブリテン島のバイニング族の仮面などがある。

メラネシアでは、一般的に祖先崇拜、秘密結社に基づく仮面が各地にみられ、それは精霊や、祖先の姿を象るものが多い。また、この地方では仮面にあたる単語がなく、多くの場合は死者や祖霊などの名前と呼ばれることから祖先崇拜との関係が深いという指摘もされている [福本 1981: 172]。そのほかに仮面には結社や氏族、親族、身分制度などにまつわる様々な副次的機能がみられるとされ、ある種の職別のための役割も併せて指摘される [ibid.]。福本は、こうしたメラネシアの仮面の形態は、死者から死者の仮の姿を経て変化した結果生まれたものであるとし、仮面は死者の再現方法に間接的で造形的な要素を加えられたものという自身の仮説も唱える⁴⁾。

この地域における仮面の議論として、先述したシュミッツ、ジェルに加えてフォージによるものがみられる [Forge 1973]。セピック河流域の地域文化に着目したフォージは、当該社会にみられる造形品に注目し、それらの多様なスタイルと内包された意味について分析を試みる。彼は、こうした多様なスタイルは本質的にコミュニケーションのシステムであるとし、文化集団による多様なスタイルとそれらの構成要素の継承性と動態性について言及してい

る。また、南西ニューギニアのアスマット族の祖霊研究を行った小林は、仮面を「現世とあの世との中間的存在」とし、仮面を被ることによる変身という社会的機能性について分析を加えている〔小林 1990〕。

こうしたメラネシアの仮面研究を一部概観していくなかで、まずその造形的な特徴は前提とされつつ、次に当該社会内における社会的機能性や意味論的分析への言及がなされる傾向を指摘することができるだろう。

2-3 小結

ここまで仮面に関する研究を概観してきたが、そこにはある傾向がみられる。まず、仮面は民族芸術としての優れた審美性と文化様式の表象として適した対象という認識のもとで取り扱われてきたということである。次に、当該社会におけるコンテクストとの関係性からみる機能論的や意味論的分析、または仮面の物質性に主眼を置いた物質文化研究の成果もみられ、これらは仮面をめぐる多様な視点を提供している。

こうした研究の背後には、ある種の前提が共有されていると考えられる。つまり、仮面が所属する当該社会内において、仮面の周囲を取り巻く環境や人々、その文化との関係性から仮面は「生きている」という認識である。もちろん仮面が自然物の加工による構成体であることは言うまでもないが、研究者の関心は仮面が「生きている」という前提とその物質文化に対する人々の解釈とその実践へ向けられてきたものと考えられる。

しかし、一方で、博物館や美術館に収蔵・展示されている仮面は、その関心の対象か

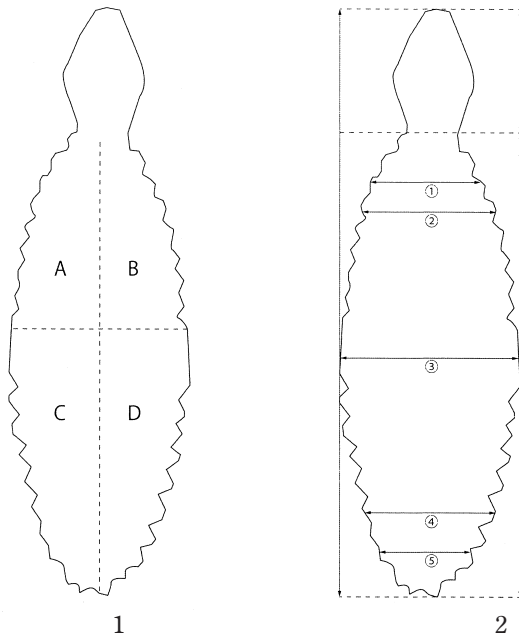
ら外されてしまった、ということも指摘できるのではないだろうか。つまり、当該社会のコンテクストより空間的・時間的に切り離されてしまった博物館資料にみる仮面は、誇張した表現になるかもしれないが、「死んでいる」仮面として捉えられその分析対象から外されたと考えられる⁵⁾。これは一概にいえることではないが、少なくとも現地調査を重視する過程において周辺的な位置付けにあったことはいえるのではないだろうか。

本稿は、仮面の分析において、これまでの人類学的研究の成果を評価しつつ、それとは違う方向性の分析を試みる。具体的には、実測図を描くことに伴う詳細なモノの細部の観察とそこにみる痕跡の分析である。モノは単なる物体ではない。人間によって生み出され、人間の特定の行為を成立させる。そして、その背景にはそれと関わる「誰か」の存在がある。つまり、モノはそれと関わる人間の意識が働きかけることによって生み出されるのであり、その痕跡は様々なかたちとなりモノに残っていると考えられるのである。仮面というモノの細部に注目し、これからの議論を進めていく。

3、分析と考察

3-1 資料の記述

これより今回の分析対象となる仮面を紹介していく。その際に、便宜上、仮面をA、B、C、Dの4つの領域に分割し、その上で各領域に配置された文様などの構成要素をみていく（第1図・1を参照）。これは、領域を分割することで、それぞれに含まれる構成要素を記述しやすくする目的のためで



第1図 分析概念図

ある。Aの領域は仮面の右目の位置より上の額部にあたる領域であり、Bの領域は稜線をはさんでAと対称の位置にある額部の領域を指す。Cの領域は、Aの下方にあたる目の位置から頬、顎の先端にかけての領域であり、Dの領域は中心線をはさんだCとは対称の位置となる。

・11-347 (第2図・1)

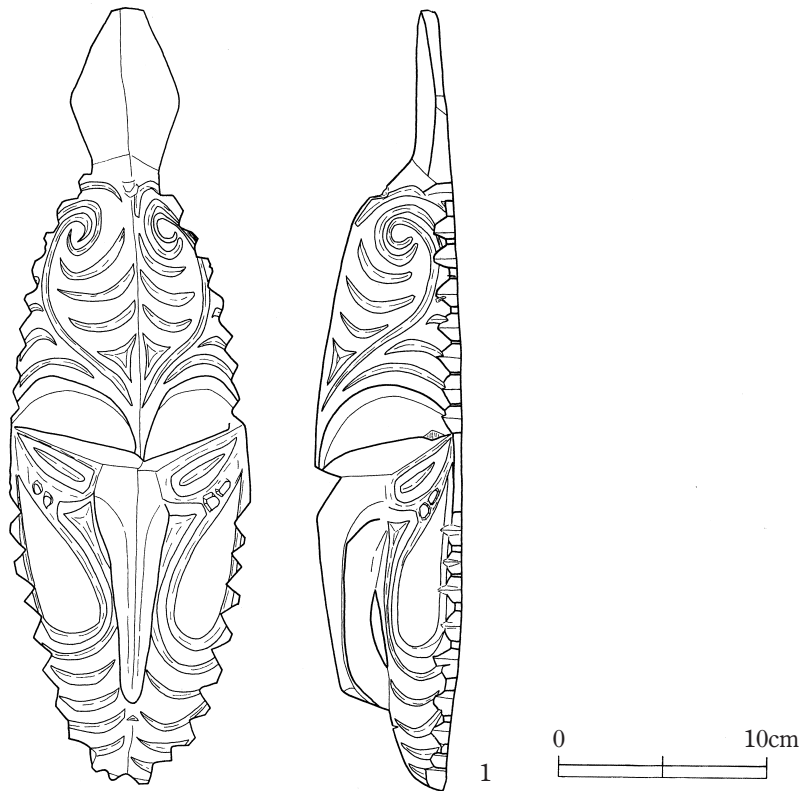
その輪郭は楕円形を基本とし、円周上に鋸歯状の装飾(以下、鋸歯状装飾)が刻まれる。菱形の装飾を含む頭頂部から顎の先端までの全長は37.2cmであり、顔面のみでは29.2cm、横幅の最大値は11.6cmとなる。この顔面部のみの縦の長さに対する横幅の比率は、①=0.25、②=0.29、③=0.40、④=0.27、⑤=0.20となり、中心となる③から両先端の①・⑤までゆるやかな曲線を描いた楕円形であることがわかる(第1図・2を参照)。また、額部と顎部の曲線の

あり方を比較すると、顎部のほうがやや鋭くなっていることがその比率からいえる。

顔面は鼻を中心に、目と耳の表現がみられる。その目はつり上がり、額の角度と連動していると考えられる。目の輪郭は浮き彫りによる表現がなされ、内側は彫り込まれている。鼻は、大きく湾曲し、鳥の嘴に似た形を成しており、耳にあたる部位は、鋸歯状装飾とは区別された平らな形を成している。

領域Aにおいて、額は半円状に彫り込まれ、その上方の空間には刻線による文様(以下、刻線文様と呼称)が刻まれている⁶⁾。中心線に近い下部から上方にかけて曲線を描きつつ、その先端が螺旋状に丸まる文様(以下、螺旋状文様と呼称)があり、それによって空間が二分割される。それぞれの空間に連続した弧状の文様(以下、弧状文様と呼称)が刻まれている。内側は弧状文様が3本と三角形の文様(以下、三角形文様と呼称)が1つであり、外側は4本の文様が連続体を成している。領域Bは、その要素と配置のあり方はAと対称的に一致している。

領域Cには目が刻まれ、その下方に文様が刻まれている。目のすぐ下に円形の装飾が2つ並んだ状態で表現され、その位置から頬をにかけて大きく湾曲した文様が刻まれている(以下、S字状文様と呼称)。そして、頬から顎先端にかけて、連続した4つの弧状文様が刻まれている。領域Dを占める要素とその配置は、Cのものと大まかに対称を成しているが、弧状文様に多少のずれがみられる。



11-347

第2図 仮面実測図(1)

・11-348 (第3図・2)

この個体の頭頂部から顎の先端までの全長は27.5cmであり、その横幅の最大値は9.5cmである。頭頂部から顎の先端部における縦の長さは27.5cmであり、その幅の最大値は9.5cmである。全長に対する横幅の比率は、①=0.25、②=0.30、③=0.34、④=0.28、⑤=0.24となり、11-347と同様、中心となる③から両先端にかけてゆるやかな曲線を描く楕円形であるが、中心が少し細い印象を受ける。顔面の部位は11-347と同様に鼻、目、耳の表現がみられる。

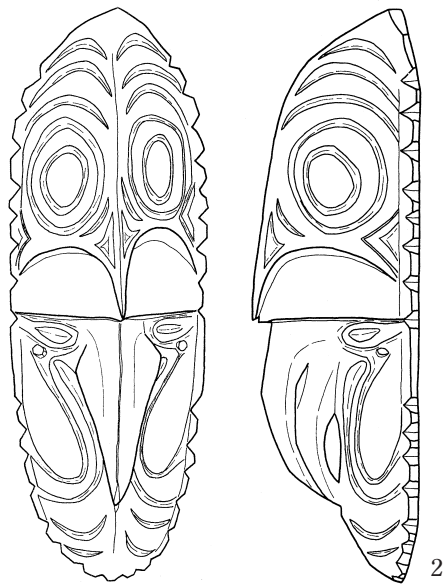
この領域Aにおいて、額は半円状に彫り込まれ、その上方には刻線文様が刻まれている。中心には同心円状文様(以下、同心円状文様と呼称)が刻まれ、その周辺には

広がるように連続した弧状文様と三角形状文様が配置されている。領域Bは、その要素と配置は対称的に一致している。

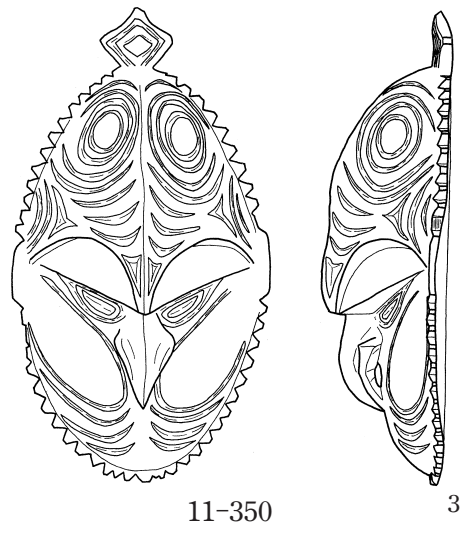
領域Cでは、目のほかにいくつかの文様が彫り込まれる。目の下には円型の装飾が1つ表現され、その位置から頬にかけて大きく湾曲したS字状文様があり、その下方には先端にかけて連続した弧文様が刻まれている。領域Dにおいても、それぞれの要素と配置は対称的に一致している。

・11-350 (第3図・3)

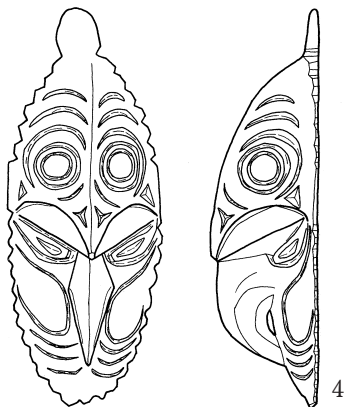
その全長は22.8cmであり、顔面部においては19.9cm、その横幅の最大値は12.4cmとなる。この横幅にみる比率は、①=0.32、②=0.47、③=0.62、④=0.46、



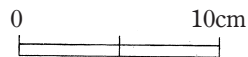
11-348



11-350



11-351



第3図 仮面実測図(2)

⑤=0.36となり、中心から両先端までゆるやかな曲線を描いている。さらに、先述した2つの個体に比べて①から⑤までの比率が大きいことから、横幅がより広がった楕円形であることが示される。また、顔面の構成部位であるが、同様に鼻、目、耳の表現がみられる。

領域Aにおいては、目の上方に半円状の

彫り込みがなされ、その上方には刻線文様が刻まれている。頭頂部に近い位置に同心円状文様が刻まれ、中心に2重に並び、一番外側の線は円の一部が離れた形（アルファベットのCに近い形）を成している。そして、その下方には連続した弧状文様と中心に向かって広がるように刻まれた弧状文様がある。これらの要素は、領域Bにお

いて対称的に刻まれている。

領域Cでは、目の位置から頬にかけて大きく湾曲した刻線が刻まれ（以下、C字状文様と呼称）、その下方には連続した3つの文様が並んでいる。そして、それは領域Dにおいても対称的な一致をみせる。

・11-351（第3図・4）

楕円形を輪郭の全長は19.1cmであり、顔面部のみでは16.9cm、その横幅の最大値は7.3cmとなる。横幅にみる比率は、①=0.24、②=0.33、③=0.42、④=0.32、⑤=0.24となり、中心から両先端にかけてほぼ同等の角度をもつゆるやかな曲線を描いている。顔面の部位は、これまでの個体と同様に鼻、目、耳の表現がみられる。

領域Aにおいて、額には半円型の彫り込みがみられ、その上方には刻線文様が刻まれている。中心に同心円状文様がみえ、これは中心に2重の円が並び、その外側に弧状文様を連続して配置している。また、額部などに三角形文様もみられる。

領域Cにおいて、目の位置から頬にかけて大きく湾曲したC字状文様が刻まれ、さらにその下方には弧状文様が3つ並んでいる。これら領域B、Dにおいて、その要素と配置は対称的に一致している。

以上が、仮面の形態的特徴と構成要素になる。その個別的特徴を除いた共通点を整理していく。全体として、形態は楕円形を基本とし、その円周上に鋸歯状の装飾が刻まれている。また、顔面全体は前面の中心に稜線がみられ、背面は平らに形成される。また、頭頂部には菱形の装飾があるが、これには個体差がみられる。その構成要素として、人間の顔と同一の位置に目、鼻、耳

といった部位が表現され、部位間の空間には刻線による文様が刻まれている。そして、それぞれの文様は稜線を中心として大まかな対称性、つまり、左右の要素が対称的に一致していることがわかる。

3-2 バリエーションの可能性

3-2-1 形態のバリエーション

対象資料は、基本的に楕円形で鋸歯状装飾が刻まれているという点という共通点をもつ。しかし、ここでは形態が一樣という点に終止するのではなく、さらに詳細にみることで、ある点における形態のバリエーションの可能性を指摘する。その部分とは、全長となる縦の長さに対する横幅の長さの比率である。この部分は外見でその差違を見出すことも可能であるが、今回はそれを数値化し、より詳細な分析を試みる。

まず、11-347と11-351はその比率が約0.4とお互いに近い値を示し、中心から頭頂部の先端と顎の先端へ向かう値の表れ方もほぼ同等である点において、輪郭の形態はほぼ同等と考えることができる。11-348をみると、中心から両先端へ向かう値がかなり近い一方で、横幅の比率が約0.3と先述した2つの個体よりも小さい値を示すことがわかる。印象として側面が直線的という点は、この横幅の比率が小さいという点に由来するものと推測される。最後に、11-350をみる。この個体は、横幅の比率が約0.6と最も広い値を示しており、中心から両先端へ向かう際の値も大きいことがわかる。これは、前の3つの個体以上に高い比率であり、このことから11-350は楕円形でありつつ、横幅に関して、他の個体以上の広さを有している個体ということ

指摘できる。

このように、視覚的な印象として感じる形態の差を数値化することで、よりそれらの個体差がみてとれるようになる。対象仮面の形態は言説的に「楕円形」という単語によって表現できるが、横幅の比率に応じて、(11-347・11-351)、(11-348)、(11-350)の3つのグループに分類される可能性を考察することができる。

3-2-2 刻線文様のバリエーション

まずは、仮面の刻線文様の基本的な種類をみていく。領域A、Bにおいては、同心円状文様、連続した弧状文様、三角形状文様、螺旋状文様が確認できる。続いて領域C、Dにおいては、頬を象るように刻まれたC字状文様と、S字状文様の横に円状装飾が配置されている文様、そして、それら文様の下方に配置される連続した弧状文様がある。以上、領域A、Bでは4種類、領域C、Dでは3種類の文様が確認でき、仮面上の配置はこれらの組み合わせによるものといえる。

ここにみる数種類の文様は、どのように組み合わせられているのか。まずは、領域A、Bをみていこう。11-348、11-350、11-351において、同心円状文様と弧状文様、三角形状文様が組み合わせられており、同心円状文様が空間の中心、もしくは上部に置かれ、その周辺に広がるような形で弧状文様が配置されている。三角形状文様は、側面部、もしくは額の中心部に置かれている。これらの文様は、同心円を中心にその周辺の空間を埋めるような形で配置され、例えば弧状文様の数が変化したとしても基本的な配置のあり方は変化していないことが指摘で

きる。そのため、この同心円を中心にした文様の配置は、対象となる仮面製作における1つのパターンであると考えられる。一方で、11-347の個体は上述したパターンはみられない。ここでは螺旋状文様と弧状文様、三角形状文様の組み合わせがみられる。螺旋状文様が空間を分割するように置かれ、分割されたそれぞれの空間に弧状文様、三角形状文様が刻まれており、これも1つのパターンといえるだろう。

ここにみる2つのパターンの大きな違いは、空間の中心になるのが同心円状文様であるか、螺旋状文様であるか、というところにみられる。どちらを配置するかによって弧状文様の配置の仕方が変化してくるのである。その一方で、額中心にみられる三角形状文様は変化することなく配置される様子もみられる。いずれにせよ、領域A、Bにおける文様のパターンとして、同心円状文様を中心としたもの、螺旋状文様を中心としたもの、これら2つのパターンが存在するといえる。

それでは領域C、Dではどのようなパターンがあるのだろうか。11-347と11-348では、頬を象る刻線がS字状文様と円型装飾がみられる。また、顎にあたる空間には連続した弧状文様がつけられている。一方で、11-350と11-351では、頬を象るC字状文様が、その下方には前者と同じように弧状文様がつけられている。

このように領域C、Dには2つの文様パターンがみられ、その大きな違いは頬を象る文様であるといえるだろう。弧状文様は、その数が違えど、その配置は変化することはない。頬を象る文様と弧状文様のセットは、この空間を埋める構成要素とし

て考えることができるのである。

以上、領域 A、B と領域 C、D における文様のパターンをみてきた。それぞれに「同心円状」文様と「螺旋状」文様、「S 字状」文様と「C 字状」文様の 2 つのパターンがみられ、合計すると、この仮面の刻線文様には 4 つの文様パターンが存在することがわかる。

ここからは、各仮面におけるこれらの文様パターンの組み合わせに目を向けていく。それらを整理すると表 1 のようになる。

11-347	螺旋状	S 字状
11-348	同心円状	S 字状
11-350	同心円状	C 字状
11-351	同心円状	C 字状

表 1 文様パターンの組み合わせ

螺旋状文様と S 字状文様は 11-347 のみにみられる組み合わせであり、11-348 は同心円状文様と S 字状文様が組み合わせられている。また、11-350 と 11-351 では、それぞれ同心円状文様と C 字状文様の組み合わせがみられる。この表をみると、螺旋状文様は S 字状文様との組み合わせがみられる一方で、同心円状文様との組み合わせは C 字状文様と S 字状文様であり、両者ともにパターンとして結びつく可能性があることを示唆している。これらの分析から、この仮面の文様パターンには 4 種類がみられ、それらの文様の組み合わせには 3 つのパターンが存在することがいえる。つまり、文様構成に注目する場合、あくまで当館の収蔵資料の範囲内でいえることだが、仮面は 3 グループに分類できる可能性

を考えることができ、さらに、11-347 の文様の特有性や 11-348 の折衷性も注目すべき点と考えられる。

3-3 モノの背景にみる製作者の動き

3-3-1 仮面にみる対称性

先述してきたように、仮面の文様には複数のパターンがみられる。そして、それを構成する各要素は、稜線を中心として左右に対称的に一致している。刻線文様の形やその数だけではなく、鋸歯状文様の数もほぼ同じように彫られていることから、製作者は文様に対して対称性という意識を働かせていることがわかる。

しかし、各要素やそれらを構成する位置関係が対称的であるのに対して、各要素の形態に関していえば、多少の差違が生じていることもまた指摘することができる部分である。つまり、その点からみれば、仮面は完全な左右対称ではないといえる。観察者側から見ると、表面に刻まれた要素の一致という視覚的印象から左右対称という意識が働くものと考えられるが、実際にそれぞれの形態には多少なりともずれがみられるのである。

この点から次のことがいえるだろう。つまり、今回の仮面のように、それぞれの要素が左右に対称的に一致する、ということ、形態までも含めた厳密な左右対称が成立するということは、意味が異なるということである。この仮面のように、要素が左右対称的に一致する場合、製作者や使用者は、その視覚的印象から大まかに左右対称であることを認識するのであり、個別具体的な形態に関しては多少のずれは許容されていると考えられる。言い換えれば、仮面

の文様において、製作者の認知的に重要なのは、各要素とその配置が対称的に一致していることであり、個別的な形態はそのことほど重要ではないという意識であったと考えられるのではないだろうか。

この点をふまえると、要素の配置やそれぞれの形態をも含めて厳密な左右対称が成立するという事は、製作者側に相当に強い意志と技術が必要であることも指摘することができるだろう。つまり、対称的に一致させる場合と厳密な左右対称を成立させる場合、その両方の立場から製作される完成品をみて、我々はそれぞれに左右対称を成すモノが製作されたと認識するが、その細部においては製作者の意識や技術レベルにおいて差が生じていると考えられるのである。

3-3-2 施文順序

さて、今までは仮面に表れている形態的特徴と文様構成について述べていたが、ここからは仮面にみる製作痕跡に注目していきたい。この部分は、確かにわずかな痕跡に過ぎないが、よくみると製作者の製作時における動きを示す手がかりになりうると考える。今回は、その痕跡が顕著に残されている 11-347 から分析していく。

まずは、鋸歯状装飾とその周辺に配置されている弧状文様の関係性について注目していきたい。この両者の重なり方から、製作者がこの部分を手がけた順序について推測することができると思う。それでは、顔面の頬部に注目してもらいたい。ここはC字状文様と鋸歯状装飾が重なり合う部分であるが、その重なり方として鋸歯状装飾が文様へと深く彫り込まれることで、文様

が所々に寸断されている様子がみられる。また、領域 A、B にある側面側にある弧状文様もみると、その端部が鋸歯状装飾によって寸断されていることがわかり、こうした様子は仮面全体にみられる。このことから、刻線文様と鋸歯状装飾の製作順序では、先に文様が刻まれ、その後に装飾が彫り込まれたものと推測することができる。

この製作順序の推定から、製作における仮面製作者の動きについて考察を向けていきたい。仮面製作者は、先に輪郭を形作り、その後に内側の文様を手がけたのではなく、その逆で、先に内側の文様を仕上げた後に、鋸歯状装飾にみられる輪郭を手がけている。つまり、製作者はその製作時において、仮面の内から外へと工程を広げていったものと考えられるのである。この点からは、製作全体の工程へとその分析をつなげることも可能ではないだろうか。つまり、製作における最初の起点は中心となる鼻とその周辺の部位であり、その後、空間の空いた位置へ刻線文様を配置し、最終的に円周上に鋸歯状装飾を彫り込む、という「内から外」へとという製作工程の推測へとつなげることができると考えられるのである。

3-4 小結

ここまで仮面の様々な物質的痕跡、その細部をみることによる分析を試みてきた。そこでは、まず、形態と文様構成からはそのバリエーションの可能性を指摘し、その上で、仮面の文様にみる対称性からは要素が左右対称であるということの意味と、それを刻む製作者の意識について述べた。そして、最後に施文順序からは、「内から外へ」

という基本的な製作工程のあり方へ考察をつなげている。

この仮面を仮面たらしめているのは、その形態や文様構成によるところが大きいものと考えられ、視覚的印象という点においても、このようなモノの細部はあまり注目される箇所ではないかもしれない。しかし、完成品に至る過程において、確かに製作者によるこうした細部への働きかけがなされていたのであり、そこに彼らの意識や行為の動きをみることは可能であると考えられる。

このようなモノの細部をみるなかで、さらに、その痕跡がつけられたコンテクストを考えることも重要である。各痕跡が意識的なものか、無意識的なものか、集団によって共有されているものか、あるいは個人的な癖によるものか、など、その物質的痕跡がどのような人間の意識や行為に由来するものであるのか、という点はモノを分析する上で重要な点と考える⁷⁾。この点は、博物館資料のみから考えるのは困難ではあるが、その視点へ至る過程において、モノの細部をみること、そして、そこから分析を行うことは必要不可欠なものといえるのではないだろうか。

4、おわりに

本稿における分析は、当館の博物館資料のみを対象とし定量的なものではないことから、セピック河流域における文化の一般性を示すことは難しく、あくまでも当館の範囲内における限定的なものといえる。しかし、そうした限定的な資料からも、そのモノ自体の細部が人間の意識や行為と連関しているということは多少なりとも示すこ

とができたのではないだろうか。本稿において、仮面の民族誌資料というモノを注意深くみることによる新たな知見を提供できていれば幸いである。

註

- 1) 「民族誌資料」についての言及は黒沢 [2011] に詳しい。
- 2) 吉田は、その研究の一例としてパプアニューギニア北東部の芸術と宗教について扱ったシュミッツ [Schmits 1963] を挙げている。
- 3) 『仮面の道』の原著は1975年に、*Le voice des masque* として出版され、日本では1977年に訳書が出版された。
- 4) 一方で、頭蓋骨彫刻のような死者の仮面は、生きている者が身につける仮面から派生し、その対立物としてつくられたものではないか、とする説もみられる [ジャン 1963 : 11-12]。
- 5) 博物館資料としてではないが、仮面の形態が分析対象から外される例もみられる。例えば、仮面の様式は周辺社会の歴史的関係性を再構成する手がかりになるという指摘の一方で、当該社会の人々はその形態に大きな価値をもっていないことを理由に分析対象から外すという動きもみられる。[吉田 1992 : 379]。
- 6) 文中において、文様や装飾の呼称名をその形態別に設定しているが、これは筆者が議論を進めるにあたって便宜上設定したものであり、あくまでも筆者の主観的認識上の名称であることを断っておく。
- 7) 後藤は、物質文化とそのスタイルにつ

いて言及しており、民族考古学的視点から種々の研究をとりまとめ、その上で物質文化の様々な属性における脈絡とそれが示す意味を明らかにすることの重要性を説いている [後藤 2001 : 80]。

引用・参考文献

Forge, Anthony

1965 *Art and Environment in the Sepik. Proceedings of the Royal Anthropology Institute of Great Britain and Ireland*, : 23-31.

1973 *Style and Meaning in Sepik Art*. In Anthony Forge(ed.) *Primitive and Art Society*, pp169-192. Oxford University Press, London.

Gell, Alfred

1985 *Style and meaning in Umeda dance*. In Paul Spencer(ed.) *Society and the dance : The Social anthropology of process and performance*, pp. 183-205. Cambridge University Press, New York.

後藤明

2001 『民族考古学』、勉誠出版。

Harley, W. George

1950 *Mask As Agents of Social Control in Northeast Liberia*. (Papers of the Peabody Museum, 32 (2)). Peabody Museum, Cambridge.

福本繁樹

1981 「オセアニア 民族美術の宝庫・メラネシアの仮面」『仮面』梅棹忠夫・木村重信監修、講談社、pp. 172-173。

ジャン・ギアール

『南太平洋美術』岩崎力訳、新潮社。

ジャン＝ルイ・ベドゥアン

1963年『仮面の民俗学』斎藤正二訳、白

水社。

木村重信編

1986 『民族芸術学・その方法序説』、日本放送出版会。

木村重信

1994 『民族美術の源流を求めて』、NTT出版株式会社。

栗田博之

2004 「パプアニューギニア—モザイク状の民族分布—」『国勢調査の文化人類学—人種・民族分類の比較研究—』、青柳真智子編、古今書院。

黒沢浩

2011 「民族誌資料をどのように展示するか」『南山大学人類学博物館所蔵民族誌資料の研究 タイ北部山地民の現在 / パプアニューギニアの物質文化』 : 161-166。

小林眞

1990 『祖像の民族誌—南西ニューギニア・アスマットの魂の形象 bis—』、蹲踞館。

レヴィ＝ストロース

1977 『仮面の道』、山口昌男・渡辺守章訳、中田製函所。

中尾世治

2011 「マテリアリティとモノの意味—残された / 残ってしまったモノ、「例示」と「表出」、「原子貨幣」—」『南山考人』 39 : 53-72。

Read, W. Dwight

2007 *Artifact Classification*. Walnut Creek, California.

Schmitz, A. Carl

1963 *WANTOAT : Art and Religion of the Northeast New Guinea Papuans*. The Hague, Paris.

佐々木重洋

2000 『仮面パフォーマンスの人類学—アフリカ、豹の森の仮面文化と近代—』、世界思想社。

2012 「仮面と物質性：仮面論の再考に向けて」『名古屋大学文学部研究論集（哲学）』174（哲学58）：31-51。

2014 「「物質性」をめぐる複数の理解との対峙—アフリカ、エジヤガム社会の事例から—」、『年報人類学研究』4：92-106。

豊田由貴夫

2005 「パプアニューギニア、セピック地

域の住民と造形美術品」『オセアニア美術にみる「知流」を超えるもの』埼玉県鶴ヶ島市教育委員会編、社里文出版、pp. 43-62。

吉田憲司

1992 『仮面の森—アフリカ・チェワ社会における仮面結社、憑霊、邪術』、講談社。

吉田ゆか子

2011 「仮の面と仮の胴—バリ島仮面舞踊劇にみる人とモノのアッサンブラージュ—」、『文化人類学』76(1)：11-32。

（南山大学人類学博物館）

A Wooden Mask from the Sepik Area, Papua New Guinea

NYOHJOI Keita

This paper makes a report on a wooden mask from the Sepik area, Papua New Guinea. This item, registered as 'Wooden Mask (JINMEN —human face—)', is one of the ethnographical materials in the Nanzan University Museum of Anthropology. It is supposed that the Rev. Fr. Heinrich Aufenanger, a missionary of the Divine Word Society (SVD) and professor of Anthropology at Nanzan University, was greatly connected with its collection. Museum items such as masks, collected from the traditional folk society, are separated from their original social context, so that there would be various limitations as the subject of research.

The author, focusing on the mask as an ethnographical material which reveals the human history, points out the possible variation of masks by observing some traces such as form and design pattern, and tries to analyze maker's consciousness and workings behind the mask itself. By observing this kind of subject material, it is expected that we can approach the 'people who took part in those materials'.

南山大学人類学博物館所蔵のリス族の女性の衣服について

西川由佳里

1. 衣服の発展と民族衣装としての衣服

南山大学人類学博物館（以下、人類学博物館）には、2000年に上智大学より移管された、タイ北部の山岳地帯に居住する山地民¹⁾の民族誌資料がおおよそ2000点収蔵されている。これらの資料は、「上智大学西北タイ歴史・文化調査団」が1969年、1971年、1973年の3度に渡る調査によって収集してきたものであり²⁾、そのうち、衣服は約270点含まれている。本稿では、その中からリス族の女性の衣服を取り上げ、調査時における彼らの衣生活と、民族衣装としての衣服の変遷について報告を行う。

本論に入る前に、まずは簡単に民族衣装についての議論のいくつかを提示しておきたい。

(1) 民族衣装とその社会的性質

衣服は、人々の生活環境・形態によって多様化の道筋を辿った。長年に亘り世界各地の衣服や装飾品の収集にあたった田中千世は、「衣服も、道具が手の延長であるように、人間生活の環境に応じて体を保護し、少しでも美しく、楽しく生きるために工夫され生まれた、皮膚の延長である（田中1985）」と語る。衣服は、まるで皮膚のように、人々の身体と親和性が高く、生活環境・形態などの影響を受けやすいものなのである。このように、人々の生活と密接な関係にある衣服は、自集団と生活環境・形態が

違う人々（他集団）との間で差異を生み出した。差異は、次第に明確な境界線となり人々の間に横たわった。元々は日々を快適に過ごすための「普段着」であった衣服は、他者との差異を意識することで、「民族衣装」という境界線として次第に認識されるようになっていった。

(2) 民族衣装と記号性

境界線としての民族衣装は、「記号性」という言葉に置き換えて論じられた。記号性とは、身分や権力、職能、などを区別するための記号としての衣服の役割を指す。視覚的情報伝達量の多さと他者に与えるインパクトの大きさという点において、衣服は記号に適していた。中国政府による、民族衣装を基準とした少数民族³⁾の分類は、その顕著な例である。少数民族内のグループ分類に、民族衣装の色や形、装飾を基準として用いたのである。このように、民族衣装に帰属集団を表す指標としての機能があることは間違いない。しかし、ここで見誤ってはならないのは、この記号性は不変ではなく、常に更新されるものであるという点である⁴⁾。

民族衣装には自集団と他集団を区別する記号として一定の機能がある。「普段着」としての衣服は、内部に対して同一化を図り、外部に対して差別化を図ることで、集団のアイデンティティを表現するための社

会的機能を備えた、「民族衣装」へと変質した。ただし、民族集団を特徴づける独自性一つまり記号性は内外からの影響を受けて日々目まぐるしく変化しているのである。

2. タイのリス族について

(1) 移住の歴史

リス族の自称は「リースウ (Resaw)」で、タイ人には「リーサォ」、中国では「^{リス}傣僳」と呼ばれている (伊藤 1990)。言語分類は、漢・チベット語族チベット・ビルマ語群イ (彝) 語系に属する。リス族の起源は、現在の四川省よりもチベットに近い場所であったと推定されており、中国南西部に居住していた、烏蛮 (漢民族にとっての異民族の総称) の一部を形成した「羌」の分派ではないかと言われている。ただし、固有文字を持たないため⁵⁾ 彼ら自身による記録がなく、また中国王朝の記録を探っても、唐代以前に傣僳の名が文献に登場しない⁶⁾ ため、民族の歴史的起源については不明な点が多い⁷⁾。

リス族は現在、中国では雲南省を中心に西南地区の山岳地帯に約 60 万人、ミャンマーのカチン州・シャン州を中心に約 30 万人、インドのアッサム州に約 1000 人、そしてタイ北部に約 4 万人居住しているとされる。その分布域は、東南アジアを流れるサルウィン川 (中国では「怒江」と呼ばれる) の南北に帯状に広がっている⁸⁾。リス族自身の認識においてもサルウィン川は特別な存在であり、その証拠に、リス族内で相対的なグループ分けをする時にはこの川を指標としている。サルウィン溪谷一帯 (雲南省西部からミャンマーのカチン州北部) に居住するリス族は、自らをロヴ・リ

スと称している。彼らは、サルウィン川下流域 (ミャンマーのシャン州からタイ) に住むリス族をルシ・リスと呼ぶ。lovu は川の上流を、^{ルシ}lushi は川の下流を意味する言葉である。彼らにとっての自集団と他集団の境界は、サルウィン川の上流と下流である。一方、タイのリス族の境界は、サルウィン川の北岸と南岸である。彼らは ^{ネズグバス}Nezuthabasu (川のこちら側 (北側) の人々の意) を自称とし、川を挟んで反対側、つまり南岸のリス族に対しては ^{ネズグバス}Nezugubasu (川の向こう側の人々) と呼んでいる (綾部 1998)。

明代以降、中国のリス族の西方への移住が盛んになった。これには、ナシ族⁹⁾ などの土司 (元、明、清代の各王朝により間接統治を委託されていた各族の首長) の圧制が一つの契機になった (栗原 2000)。弾圧から逃れるため、瀾滄江 (メコン川) や怒江流域に移住したリス族の一集団は、その地を支配域としていくこととなったが、清代以降は中央政権と対立し、紛争による辛苦を味わうことになった。このように、西方へのリス族の大移動は決して平坦なものではなく、移住の度に、チベット族、タイ系諸族、ビルマ族など、大規模な他の民族集団との衝突を幾度も繰り返した。タイへは 1918 年頃に、北インド、チベット方面からミャンマーを経由し、4 つのルートから移住してきた。現在では主に、メーホンソン、チエンマイ、チエンラーイとターク、タートン周辺に居住している。タイのリス族の多くは、海拔 1,000m 級の山々が連なる高地で生活しているが、居住地により住居の様式は異なる。タイ北部では、平土間式で土壁の家屋が多く、南部のチエンマイ

辺りになると土壁ではなく竹の壁になる。さらに南方へ下ると高床式住居となるが、これは酷暑と高湿度に対応するためである(カノミ 1991)。しかし、近年では平地部・都市部に進出し、居住するリス族も少なく、その生活形態は多様化している。

(2) 文化・生業

タイに住居するリス族の言葉や習俗は、異文化が渾然一体となり形成されている。例えば、ヤン、チュー、チョワン、ミー、リーといったような姓名の付け方・呼び方は、漢民族の文化に由来している。また、1月半ばから2月半ば頃に正月を祝う習慣もある¹⁰⁾。その一方で、婚資の支払いに、ミャンマー居住時代に使用していたインド・ルピーを使う人もいる。

他の隣接諸民族同様、彼らの宗教観は、祖霊信仰と精霊信仰に基づいている。とりわけリス族は、動物供犠を伴う儀礼を多く執り行うことで知られている。また、成人男性の祭祀権継承システムとクラン外婚制を担う、イ・ツと呼ばれるクランが30ほど存在することも大きな特徴と言える。山岳部を離れ都市部で財を成したリス族にも、蓄財を儀礼に投資するという価値観は変わらず保有されている。なぜならば、持ちうる限りの財を儀礼に投資し、客人を饗応することは、彼らにとって mydu (「名声」の意) を得る手段となるからである。

タイのリス族の大半は、今も稲作を中心とした生活を営んでいるが、元来は狩猟採集生活をしており、南下に伴い、焼畑耕作を獲得していったとされている。リス族の土地に関する観念としては、包括する範囲が大きい順に、mikya、mü、tsaitso ^{ミキヤ ミュ ツァイツ}がある。

ミキヤは、広義には「この世の中で(ミキヤ・テシア)」、狭義には「地面」を意味する。ミュはクニを、ツァイツはムラを意味する。ミュは、上位レベルでは「国家」を下位レベルでは「小規模な村落空間の集合体」を示す言葉である。ただし、単独の村落にミュを用いることはなく、神話の中や村落の位置関係を示す際に使用される。これは、リス族が今まで一度も、王や元首を戴いた国家を持ち得なかったことに関係しているとされる¹²⁾。

換金作物としては、ケシ栽培を盛んに行い、アヘン・ヘロインの売買ネットワークを作り上げていた。しかし、以前は盛んに行われていたケシ栽培もタイ政府による取り締まりの強化により、1990年代から衰退の一途を辿った。とりわけ、ヘリコプター監視による、開花期のケシの一斉刈り取りが大きな打撃となった(綾部 1998、2014)。

3. リス族の衣服

(1) タイ山岳地帯の少数民族の女性と衣服

落合によると、東南アジア山岳部に居住する人々の衣服は、植民地期を境に、民族衣装として注目を集めるようになったという(落合 2014)。山地民の普段着が、「少数民族の民族衣装」として内外に認識され始めたのは、植民地時代に欧米諸国から派遣された行政官やキリスト教関係者によるところが大きい。彼らは、現地から多種多様なくらしの品々を自国に持ち帰った。後に民族誌資料と名付けられたこれらの物品は、学術研究の対象となったり、蒐集家(愛好家)たちを生み出したりした。とりわけ蒐集家たちが好んだのは、着古された衣服で、「アンティークの民族衣装」として珍重

された。

アンティークの民族衣装は、仕上がりの美しさはもちろんのこと、それらが、昔ながらの手法や素材で製作されているか否かという点を加味して評価された。山地民の日常着が、市場価値があるものとして諸外国に流通するようになったのである。現在では、タイのバンコク、チェンマイ、ミャンマーのヤンゴン、マンダレー、ラオスのヴィエンチャンやアンパバーンなどの主要都市には、アカ族やカレン族のアンティークの民族衣装を取り扱う店舗がある（落合 2014）。

今日、内外の蒐集家を虜にする、美しい民族衣装であるが、生産に携わるのはもっぱら女性であった。少数民族の女性たちは皆働き者で、家事や畑仕事、子育てと日中忙しく過ごしているが、それらの仕事の合間を縫って衣服づくりをする。糸と針を持った女性が、露台にしゃがみ込んだり、家の脇でスツールに腰掛けたりして裁縫をしている光景は決して珍しいものではなかった。このような年長者の姿を間近で見ること、年少者は衣装づくりを意識し始め、自然とノウハウを学び見様見真似で裁縫をし始めるのである。

リス族を初め、山地民の女性にとって、美しい衣服を自分の手で作り上げることは重要な仕事の一つであった。衣服の出来栄の良し悪しは、女性（とりわけ嫁として）の資質を表すとされた。働き者か、怠け者か、根気強いのか、飽きっぽいかなどが着用する衣服で見定められるため、女性たちは懸命に技術を磨いた。また、老若男女に共通して、衣服に冠婚葬祭や平時・祭事の別がほとんどなく、服一着の担う役割が非常

に大きかったために、作り手である女性たちは精力的に衣服づくりに励むことになったとも考えられる。

各戸で種を植え、収穫し、糸を紡ぎ、機を織り、染色し、縫製し……と、衣服が一から女性の手によって作られていた状況は、市場経済の発展によって一変した。衣服の原材料や既製品の購入が容易になったためである。例えば、量の報告によると、1969年の調査時において既に、タイ・パドゥア村のユーミエン族の集落では、以前使用していたとみられる糸車など紡績に関する道具は捨て置かれ、衣類用の布は村内の店で購入していた（量 1979）。また、2008年から2009年に実施された森部らによる再調査では、前述の村において、住民の衣服は他の村からの購入によって調達されていた。高齢の女性に限って、刺繍だけは自分で行っているようであるが、若年層はこれも行わないという。そしてそもそも、同村の住民の多くは、民族衣装を着用しなくなってきており、特に若年層においてこの傾向が顕著であるという。暑く、重たく、洗濯によって生地が傷みやすい民族衣装は倦厭されて、平地民と同様の衣服を着用するようになってきている。そして、元々彼らが日常的に着用していた衣服は、タイ政府主催のイベントや、^{クラタン}掛燈（男性の成人儀礼）、結婚式などの正装として用いられるようになっていた。（森部・竹野 2011）この状況は同様に、他の山地民にもみられ、モン族も今日は昔ながらの衣服ではなく、漢民族やタイの平地民の服、または洋服を着用する人が増えている。また、従来の衣服を着用しているとしても、その素材や技法に変化が表れている。ただ、女性にとっ

ては、このような民族衣装の変化は決して悪い面ばかりではないという。女性たちに課されていた、衣服製作に関わる膨大な時間と労力を削減できるためである。彼女たちが、麻栽培の労働に費やす時間を、より確実に現金収入を得ることのできる仕事に費やしたいと考えることは当然の希求であった（武田 2012）。

(2) リス族の衣服

所蔵資料の報告の前に、柴村恵子（柴村、村瀬、榊原 1987）、伊藤五子（伊藤 1990）、カノミタカコ（カノミ 1991）の報告から、リス族の男女の衣服の概要をまとめておく。

① リス族の男性の衣服

リス族の男性は、上衣、下衣、腰帯、ターバン、脚絆を着用する。上衣には、サテンやベルベットなどの光沢のある黒色の生地を用いる。襟がなく、首元から脇に斜めに打ち合わせて着る。上衣の胸、背面、肩には銀鉾を縫い付けて装飾としている。ズボンを広げると台形の袋状をしており、着用すると膝下丈のキュロットに似たシルエットになる¹³⁾。色は青ないし緑で、年配者は黒色のものを着用する。ターバンは白い布で作られている。柴村によると、調査時において既に、ターバンを着用する男性は少数派だったようである¹⁴⁾。腰帯は、腰に巻き付ける布の部分と、身体の正面に垂らす房飾りの部分とに分けられる。房は、先端にボンボンの付いた 100 本あまりの布紐を束ねて作られている。カノミによると、この布紐は、1 枚の布から 6 本作ることができるという。これは、1 枚の布を両端から

3 枚に裂き、中央で半分に折って柱に留め、垂れ下がった布を一枚ずつ紐状に縫っていくためである。この房飾りには、魔よけの効果があるという。足元には脚絆を着用する。

② リス族の女性の衣服

女性は、上衣、下衣、腰帯、頭飾り、脚絆を着用する。上衣は脇からスリットの入ったワンピース型である。中国の旗袍^{チーパオ}に似た形であると解説されることが多い¹⁵⁾。丸襟で、肩の辺りを一周する円形のヨークが付けられ、その下部には、細長い布を重ね縫いした縞模様が付けられている。この重ね縫いの部分は一重なので、裏から見ても表と同様の縞模様となっている。縞模様の中には、山形の層が作られている部分がある。この層は、2cm 角の正方形の布を半分に折って作った三角形を布に連続して並べ、これを縫い付けて作られている。女性の上衣の色は青か緑、下位は黒といったように、リス族の衣服の色遣いには決まりがあるが、唯一重ね縫いの部分のみ、製作者の好みで配色することができる。なお、柴村の調査では、縞模様部分は 1970 年代に町で購入したミシンを用いて製作されている。ミシンを使う女性たちは、しつけやピンを打たずに器用に細長い布を縫い合わせていくという。下衣と腰帯は男性と同型である。ただし、男性が身体の正面に腰帯の房飾りを垂らすのに対し、女性は身体の背面に垂らす。足元には赤色の脚絆を着用する。山地民にとって、足元の保護は重要である。木々の生い茂る道を歩かねばならない場合、脚絆は尖った枝や鋭い葉先で足が傷つくのを防いでくれる。とりわけ女性

は、丈の短い下衣を着用する傾向にあるので、リス族のみならずモン族やアカ族などの女性たちも必ず脚絆を着用している¹⁶⁾。祭事には、前述の衣服に加えて、頭飾りとベストを着用する。頭飾りは、ターバンを巻き付けたような形をしており、後方に房飾りが付けられるタイプのものが多い。頭に精霊が宿ると信じられていたため、元はターバンを日常的に着用していたという¹⁷⁾。ベストは黒色で、一面に銀の鉾が付けられている。生地は、ユーミエン、アカ、カレン族が綿を用いるのに対し、リス、モン族は従来麻を利用してきた。麻は綿に比べ、繊維が長いいため撚り合わせやすいという利点がある。摩擦抵抗に強く、発汗性に富んでおり、また、熱の伝導率が良いため、着用時に冷感を伴うことも麻の特徴である。しかし、リス族では麻ではなく、店で簡単に手に入る混紡の布を購入して使うことが多くなっている。

(3) 人類学博物館所蔵のリス族の女性の衣服

本稿で取り上げる資料はすべて、昭和46(1971)年12月19日にメーカムにて調査団が収集したものである。

① 上衣 (図1-1、1-2、1-3)

長さ110.0cm、幅122.8cm

上衣はワンピース型で、脇の20cm程下からスリットが入っている。布地は混紡とみられ、前身頃と後身頃の布は青色である。裾からスリットの切れ込み口に向かい45~47cmの長さの、紺色の三角形の布が縫い付けてある。この部分は帯飾りを巻いた時に裾の端から見えるので、アクセント

となっている。前身頃より後身頃のほうが10cmほど長い。直径約5mmの青色のポンポンが打ち合わせ部分の留め具として首元に一つ縫い付けられている。ヨーク¹⁸⁾の下と腕の部分には、縞模様の装飾がある。ヨーク下の縞模様は約5~7mm、腕の縞模様は約5mm~2.3cmの細長い布をいくつも縫い付けて作られている。なお、ヨーク下の縞模様は半円を描くが、正円ではない。上衣の袖口と肩を一周するヨークは黒、袖には赤、胸元には紺の布が使われている。なお、これらの布は合成染料で染められている。袖の縁には、黒い布を裏から3cmほど折り出して作ったトリミングが付けられている。縞模様部は直接前身頃に縫い付けられている。縞模様部は、赤、黒、黄といったように暖色と寒色の布が交互に配置されており、また、縫い糸は、赤には緑、白には赤、黒には赤といったように布の色と反対になるように選ばれている。なお、ヨーク下の縞模様部の下から4段目の縞部分にのみ、山形のプリント地が使用されている。上衣全体は手縫いで仕上げられているが、縞模様部の縫製にのみ、ミシンが使用されている。手縫い部分に使用されている糸は黒である。上衣に裏地は付けられていない。

② 下衣 (図2)

長さ61.0cm、上部幅45.0cm、下部幅76.5cm

脚を通すための穴を2つ開けた、袋形のズボンである。3部構成で、ウエストバンド、両側面、中央部で布を縫い合わせて作られている。生地は混紡とみられ、合成染料で染められている。縫製は手縫いで、黒色の糸が用いられている。布の色は黒であ

るが、腹部の片面、一部分にのみ青色の布が使用されている。裏地は付けられていない。

③ 腰飾り (図3-1、3-2)

長さ 365.0cm (右房 46.0cm、左房 45.5cm)、幅 15.5cm

中央、左右の房の3部構成の腰飾りである。筒状に合わせて縫った中央部の左右に、房が付けられている。中央部の布は両端にいく程に幅が狭くなり、先端部には、三角形の布が縫い付けられている。先端部分の三角形の布は3部構成で、底辺から1/3までは黒い布、2/3以上は赤い布(裏面は青)、二つの布の境の2~3mmほどの赤と黄色の細い布がそれぞれ縫い合わされている。この三角形の布の端は房部と繋がっており、境目で黄・赤・黒の刺繍糸をぐるぐる巻きにして固定している。房は、直径3mm程の布製の紐をいくつも束ね合わせて作られている。紐の数は右房が191本、左房が161本である。各紐の先には、上衣の留め具のポンポンと同型のもが付けられている。布は混紡とみられ、合成染料によって染められている。房部は、青、黒、緑、黄、赤といった色とりどりの紐で構成されるが、とくに赤色の紐が多い。紐の縫い糸は、黒地には赤、黄地には緑というように布地の色と反対になるような色が選ばれている。紐の先に付けられるポンポンの色も、紐と同系色とならないように選ばれている。手縫いによって製作されているが、中央部先端の三角形の布地部分の縫製にのみ、ミシンが使用されている。手縫い部分に使用されている糸は黒である。

④ 脚絆 (図4)

長さ 27.6cm、上部幅 15.5cm、下部幅

13.5cm、長さ 27.8cm、上部幅 16.7cm、下部幅 13.8cm

布を筒状に縫い合わせて作られている。上部2/3は赤い布、下部1/3には緑の布が使われており、下端の縁は4mmほどの黒い布でトリミングされている。裏地は青色である。生地は混紡とみられ、合成染料で染められている。黒色の糸を用いて手縫いで製作されている。

今回の資料調査と柴村(柴村、村瀬、榎原1987)、伊藤(伊藤1990)、カノミ(カノミ1991)の三氏の報告とを比較検討すると、次の以下のようにまとめることができる。

第一に、上衣の縞模様部分に顕著なように、作り手の女性たちが非常に色の組み合わせに腐心しているということである。色相環の正反対に位置する色の組み合わせを「補色」と呼び、これが引き起こす効果を「補色調和」という。補色調和には、互いの色を引き立てあう作用があり、絵画にも応用されている技法である。隣合わせる色どうしは正反対に近い色を選択する、という本資料にみられる規則も、おそらくは同様の効果を狙ったものではないかと考えられる。縫い糸にまで適応されている寒色と暖色の組み合わせの法則は、費やされる時間や労力を考えると本来ならば省略するのが妥当である。しかし、細部までこの基準が適応されていることから、リス族の色に対する美意識が感じられる。もちろん他の山地民も、基調となる藍色(黒~濃紺)に合う色味で装飾を加えている。しかし、リス族の衣服にみられる奔流するような色彩の豊かさは、他の山地民と一線を画してお

り、民族衣装としての特徴の一つといえよう¹⁹⁾。

第二に、柴村、伊藤、カノミらによって既に報告されているように、本資料からも、生活環境の変化によってリス族の民族衣装が元来の形から変化していることを読み取ることができた。例えば、以前は布を縫い合わせて作られていたとみられる縞模様部の山形の層は、本資料では既成のプリント布で代用されている。また、いつ頃から村に導入されたのかは定かではないが、同部分の縫製にのみミシンが取り入れられている。布を素早く円形に縫い合わせるのに、ミシンが適していたためとも考えられるし、もしかしたら、作業の分業化を意味しているのかもしれない。どちらにせよ、市場経済の発展によって、リス族の衣服の素材や製作手順が変化していることは間違いないようである。

リス族の衣服は、細部まで配色に独自のこだわりがあり、一定の規則性を持って作られている。この美意識の規格化は、集団内の衣服の同一化を強固にするための行為ともいえる。つまり、リス族にとって、衣服が集団の一員としてのアイデンティティを表現する記号（民族衣装）として機能していることの証左でもある。しかしその一方で、民族衣装が変質し更新されていく記号であるのと同じく、リス族の衣服もまた、社会やくらしの変化に伴って形を様々に変えつつあるのである。

註

- 1) 本稿では、平地に暮らす人々（水稲耕作民）に対応する位置づけとして、山地に暮らす人々という意味で「山地民

（焼畑耕作民）」という言葉を用いている。

一方、タイ政府の福祉政策と開発政策の対象として定められた「山地民」というカテゴリーもある。北部の山地で焼畑耕作や狩猟採集を営んでいる非タイ系民族を指し、「山地民」と呼称される。人口の多い順に、カレン (Karen)、モン (Hmong)、ラフ (Lahu)、アカ (Akha)、ユーミエン (Iu Mien)、ティン (H'tin)、リス (Lisu)、ルア (Lua)、カム (Khamu)、ムラブリ (Mla Bri) が含まれている。前近代国家時代、タイでは土地・人々を統治するための確固たる仕組みが出来上がっておらず、そのため山岳地方に住む人々は自治によって共同体を維持していた。しかし、このような状況も、近代国家の成立とともに一変した。1949年の中国の革命等により、タイ国家に、国境付近に住む彼らを規制する必要性が生まれたためである。「国家の安全性を保つため」という主張の元、タイ国家は「山地民」として彼ら少数民族を統治し、その一方で平地民化を推し進めた。平地民化には、「文明的に劣り、環境破壊の原因となる焼畑を行い、アヘンの元となる芥子を栽培している」山岳地方の人々を、「われわれ」と同等の存在になるように矯正するという大義名分が掲げられた。「平地の文化になってしまうことを断ち切る必要がある。ただし、平地の文化へのある程度の同化は仕方がない。というのは、20～30年前には、タイの平地民は、山地民を悪く見ていた。(中略) こうした

偏見を正すために、平地の文化を取り入れ、またタイ政府の教育を受けたり、町に出て働くようにしている」(森部 2010) という、Phagkha 村の校長の言葉からは、山地民政策の内情を垣間見ることができる。

- 2) 寄贈の経緯は、重松和男 2004「上智大学からの移管の経緯と資料内容」『南山大学人類学博物館紀要第 22 号』南山大学人類学博物館編に詳しい。
- 3) 中国において、少数民族という言葉が定着したのは、1949 年頃のことである。現在、中国の総人口の約 8 パーセントに当たる、9,056 万人が少数民族とされる。「少数」とは、漢民族に対し人口が相対的に少ないという意味であり、実際には、人口 1,555 万人のチワン族や、人口 984 万人の満州族など、人口規模が大きい民族も含まれている(曾 2000)。なお、漢民族にとっての民族衣装とは、少数民族の衣服を指した。
- 4) また衣服の記号性には、統治する側とされる側で認識に差がある場合もある。中国の瑤族(ユーミエン族)は 14 の支系に分類されているが、その呼称は、青褲ヤオ族(青いズボンのヤオ)や白褲ヤオ族(白いズボンのヤオ)などと着用する衣服によるものが多くみられる。しかし、彼らの自称は、前者は「われわれはヤオの人である」を意味する「ノンマオ」、後者は「われわれはヤオ族の人間(集団)である」を意味する「トウマオ」であり、衣服による分類は当事者間では機能していない傾向にある(金丸、田畑 1991)。また、1970 年のモン族への調査でも、自らが

属するグループを衣服によって分ける意識がないという報告がされている(新谷 1975)。

- 5) リス族は書き言葉のみで、thughu(「文字」の意)を持っていなかった。外国の宣教師が作った表音文字の使用の後、1950 年代以後はローマ字を元にした新文字「リス文字」を使用している(西脇 2004)。
- 6) 唐の『蛮書』(卷四名類)に「栗粟」の文字が認められる(西脇 2004)。明代には、『西昌県志』、『南詔野史』などに、民族名の記載がある。
- 7) 民族集団の起源を明確に辿ることができないのは、リス族だけではない。隣接民族であるモン族も同様である。移動経緯を、モン族自身が遺した移住史で復元しようとする破綻してしまう。要因としては、モン族が無文字文化であることその他、始祖の改変などの恣意的な民族史の拡大解釈が、モン族自身によって比較的容易に行われてきたという事実が関係している。隣接諸民族の中で、移住経路を自身が遺した記録から明確に辿ることができるのは、ユーミエン族である。ユーミエン族は中国華南地域に起源を持ち、モン族と似通った移住経路でタイへ移動してきた。リス族、モン族と大きく相違するのは、ユーミエン族が十干十二支の暦を基準に移住村落を記憶し、居住世帯の構成員の系譜を漢字で記録してきた点で、これにより移住史を比較的正確に辿ることができるのである(2010 谷口)。
- 8) リス族の居住地について、水源近くに

集落を形成する、と解説されることが多い。リス族同様、タイの山地民の多くは土地選定の際、水源の確保を重視する。ユーミエン族は、水利用のために家屋の前に笕を通すほどである。その一方、水利用についてさほど頓着しない民族もあり、アカ族がこれに当たる。

- 9) 雲南省西北部の麗江を中心に、四川省西部、チベット自治区東部などに居住している民族である。
- 10) 正月は、正装した男女が踊りを踊ったり、爆竹を打ち鳴らしたりして3日3晩続く(カノミ 1991)。1956年の中国政府の調査では、雲南省に住むリス族にとって、約1ヵ月をかけて催される正月は唯一の年中行事であるという。家長が酒や肉を祖霊に捧げる儀式は、中国でもタイでも同様に行われている(1999 渋谷)。
- 11) 中国やミャンマーの都市部では、大半のリス族がキリスト教に改宗している。(綾部 1998)
- 12) 焼畑耕作によって、5~10年といった短い周期で世帯単位の移住を繰り返す彼らの生活形態が、国家を持たなかった一つの要因として考えられている。
- 13) 柴村は、ズボンの形態がトルコのシャルワールに類似していると指摘している。シャルワールは女性用で、下部に足を出すための穴を二つ開けた、袋状のズボンである。リス族の下衣と違う点は、足首が窄まっている点である。着用すると、臀部から足首にかけて、かなりだぼついたシルエットになる。シャルワールの特徴としては、肌と布

の間の空間が大きく風通しが良いことが挙げられる。この空間は防寒のためにも機能し、断熱材代わりに綿くずなどを詰めることができる。また、窄まった裾は、砂塵の侵入を防ぐのに適している。トルコの半乾燥と昼夜の寒暖差が激しい気候に適した衣服である(田中 1986)。タイ北部の山岳地帯は、昼夜の寒暖の差が激しい地域である。シャルワールとまったく同等の使用方法をしないにせよ、ズボンにたっぷりとマチをとることは、気候条件を考慮した工夫なのかもしれない。

- 14) 白鳥の調査で撮影された写真を確認すると、リス族を含め、他の少数民族においても、伝統的なズボンに開襟シャツを合わせるといったように、多くの男性が洋装つまり、タイの平地部の人々と変わらない服装を取り入れている。
- 15) 旗袍は、チャイナドレスとも呼ばれる。元々は清代の満州族の女性が着用した長袍(裾の長い上衣)で、1920年代初頭には、漢民族の女性の間にも広く普及した。現在では女性の身体のラインに沿ったデザインに変化しているが、清代の旗袍は、胸から足元までをゆったりと覆う直線的なデザインであった。
- 16) なお、ユーミエン族の女性の下衣は、筒の太い長ズボンなので、この限りではない。
- 17) 調査団の記録写真を確認しても、平時、リス族の女性はターバンを着用しておらず、髪を露出させている。頭飾りを着用することは、ユーミエン族やアカ

族の女性にもみられる習慣である。ただ、リス族の女性と異なり彼女たちがそれを外すことはなかったようで、上智大学の調査時点では、人前で頭髪を露わにすることはタブー視されていた(量 1978)。

- 18) 主に、ブラウス、スカート、ドレス、子ども服などの肩、胸、腰によく用いられる当て布を指す。布の立体化と、装飾の目的を兼ねて取り付けられる(1991 田中)。
- 19) 鮮やかな色調を好む点で言えば、モン族も同様である。簡単に市販の布が手に入るようになってからは、蛍光ピンクやオレンジといったような、彩度が高い色の布地を好んで衣服に使用するようになった。しかし、リス族のように色の組み合わせで視覚的な鮮やかさを生み出すというよりは、単色の派手さを好むようである。

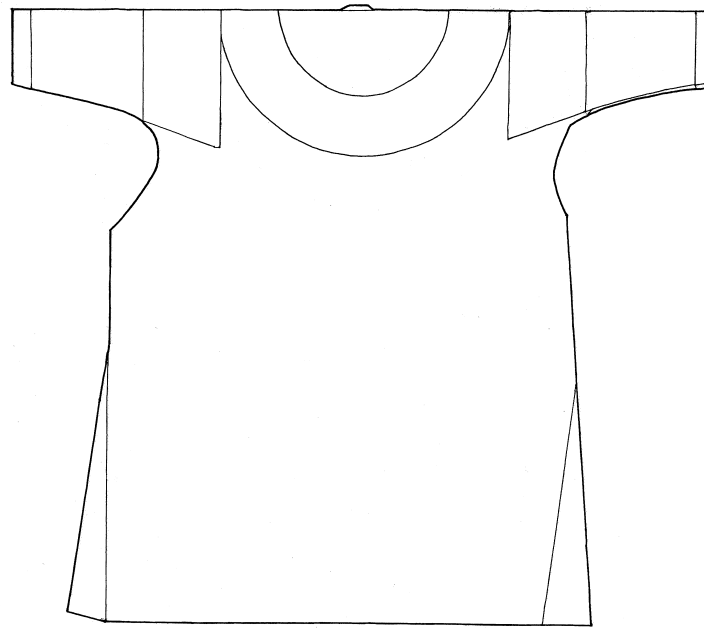
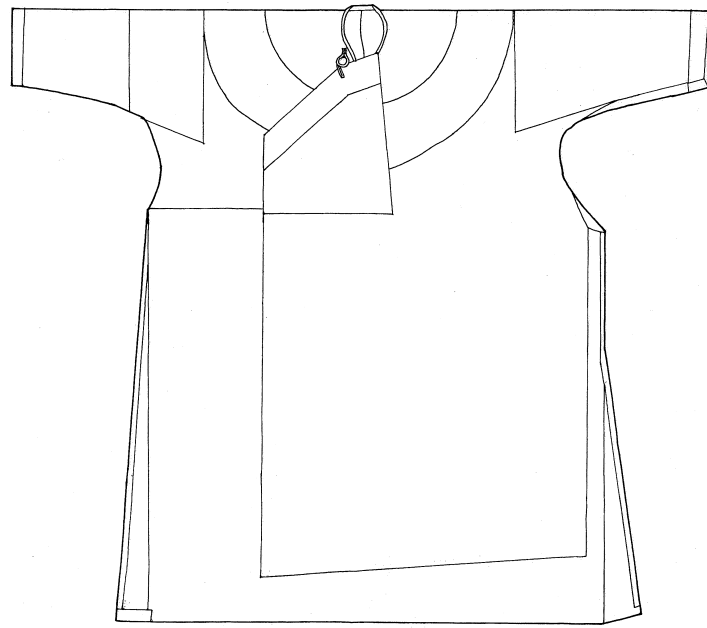
参考文献

- 伊藤五子 1990 「北部タイ山地民族の生活と習俗 リス族について」『家政研究 38号』三重短期大学編
- 落合雪野 2014 「種子からパーツへ」落合雪野、白川千尋編『ものづくりの植物誌』臨川書店
- 金丸良子、田畑久生 1991 「雲貴高原にヤオ族をたずねる」『季刊民族学 15(4)』国立民族学博物館監修
- カノミタカコ 1991 『神話の人々：タイ山岳民族の染織工芸』紫紅社
- 華梅 2003 『中国服装史—五千年の歴史を検証する—』白帝社
- 柴村恵子、村瀬史子、榊原弥生 1987 「東南ア

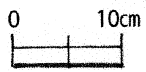
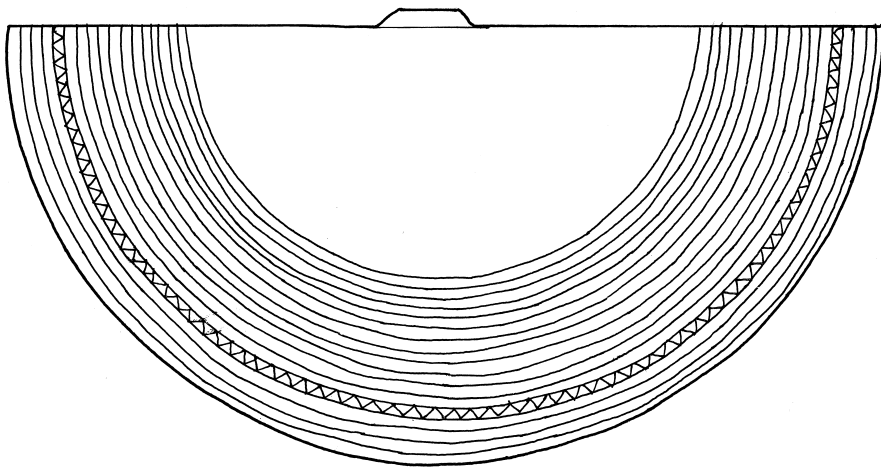
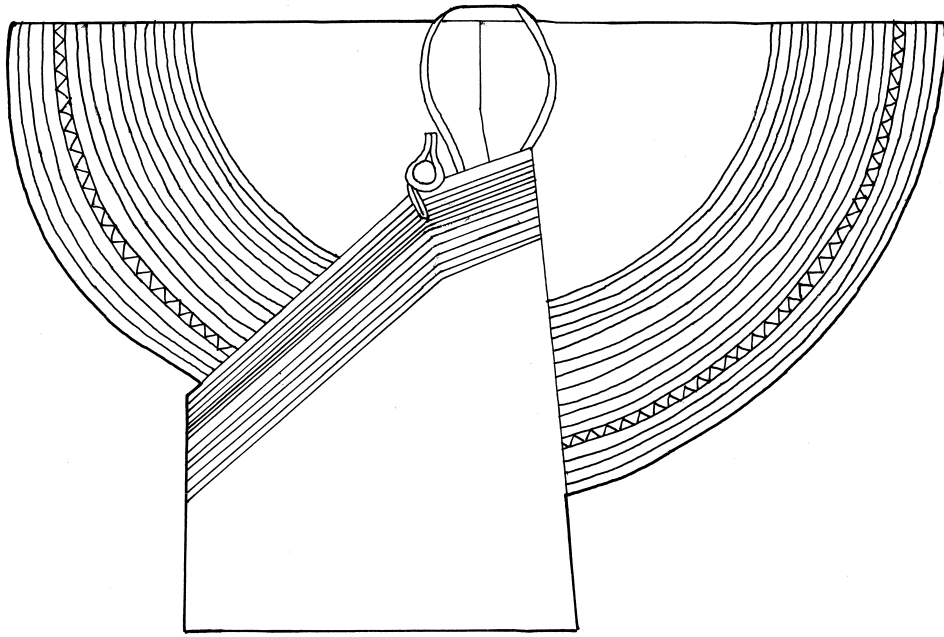
- ジアにおける民族服の研究(第5報)：北部タイ山地民族 リス族の衣裳」『名古屋女子大学紀要 33号』名古屋女子大学編
- 柴村恵子、加藤砂織 2002 「国際調査 北部タイ少数民族の衣文化に関する調査研究—国際的視点に立って」『アジア民族造形学会 2号』
- 渋谷瑞江 1999 「アジアのお正月 新年の祭りと民俗 リス族 雲南の少数民族②」『月刊しにか』大修館書店
- 武田佐知子 2012 「民族衣装における異装と共装」武田佐知子編『着衣する身体と女性の周縁化』思文閣出版
- 田口良司 2001 「民族衣裳の記号学再考」文化学園服飾博物館『世界の伝統服飾—衣服が語る民族・風土・こころ—』文化出版局
- 田中千代 1985 『世界の民俗衣装—装い方の知恵をさぐる—』平凡社
- 田中千代編 1991 『新・田中千代服飾辞典』同文書院
- 中田尚子 2009 「人間と衣服」島崎恒蔵、佐々井啓編『衣服学』朝倉書店
- 日本タイ学会編 2009 『タイ事典』めこん
- 量博満 1978 「衣生活」白鳥芳郎編『東南アジア山地民族誌—ヤオとその隣接諸民族』講談社
- 道明三保子 2001 「民族服飾序説」文化学園服飾博物館『世界の伝統服飾—衣服が語る民族・風土・こころ—』文化出版局
- 宮脇千絵 2014 「衣とアイデンティティ」『世界民族百科事典』国立民族学博物館編
- 森部一 2010 「Phagkha 村の変化—平地タイ社会へのミエン(ヤオ)族の同化と“伝統文化”の維持・復興への試み」『南山大学人類学博物館オープンリサーチセンター 2010年度年次報告書付編 研究会・シンポジウ

ム資料』南山大学人類学博物館
森部一・竹野富之 2011 「北タイの山地民ユー
ミエン（ミエンあるいはヤオ）族の社会・文
化変容 —Phadua 村と Pangkha 村の調査

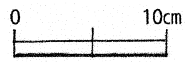
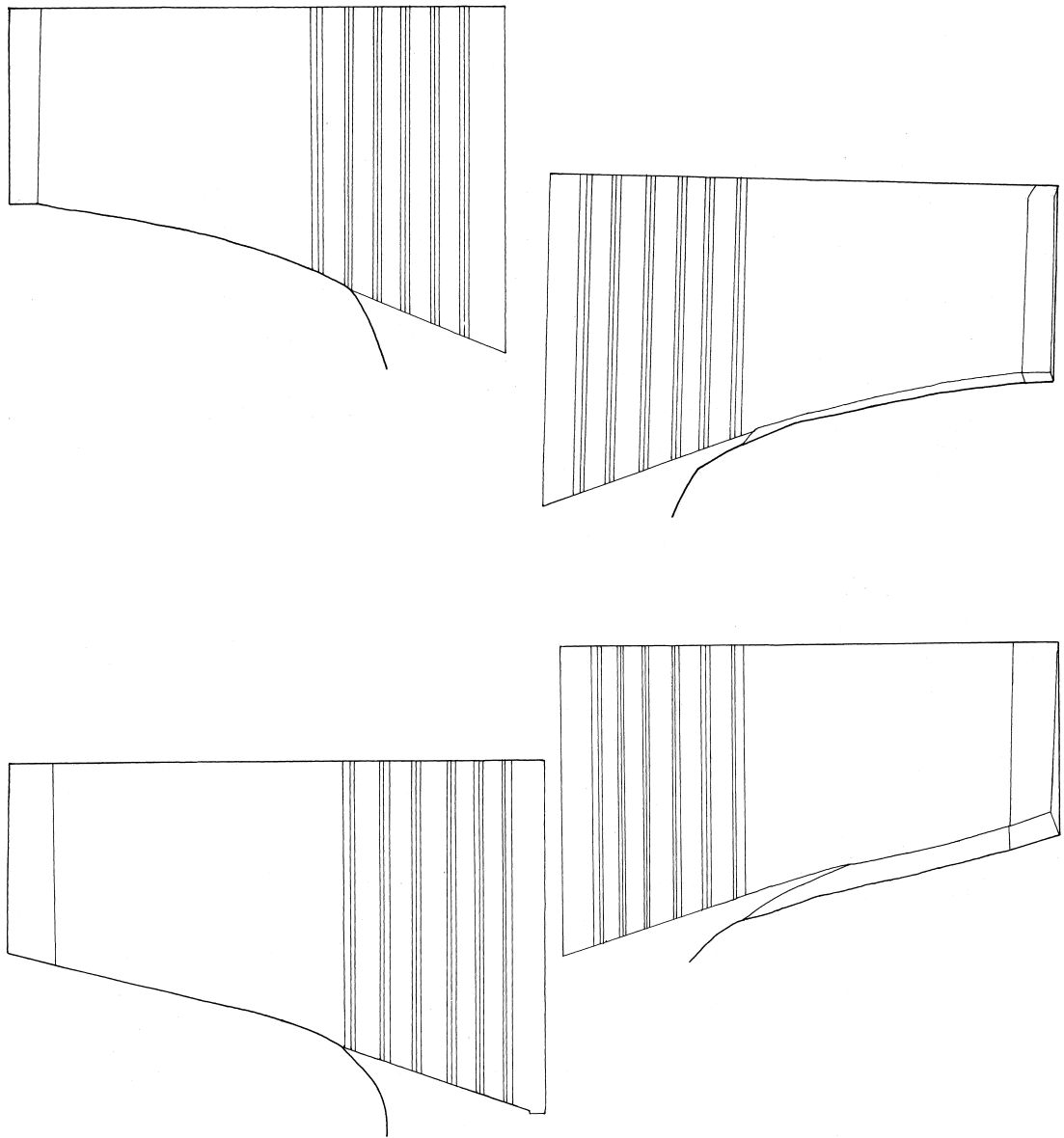
から—」『南山大学人類学博物館オープンリ
サーチセンター研究報告第5冊 南山大学
人類学博物館所蔵民族誌資料の研究』南山
大学人類学博物館



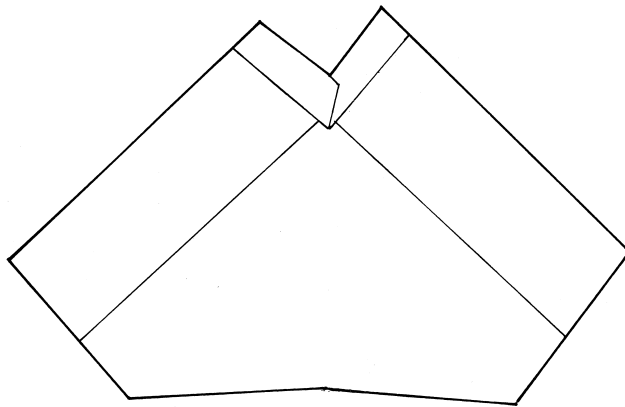
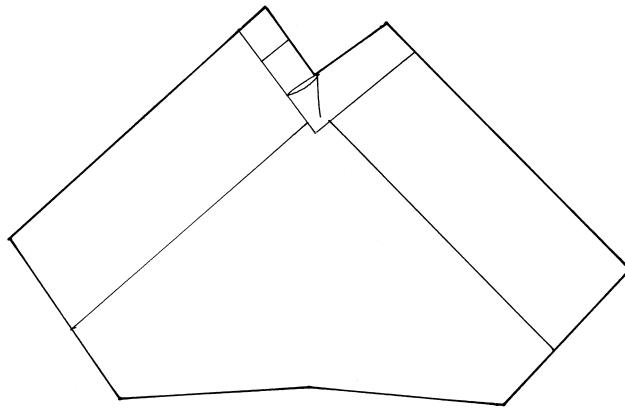
1-1 上衣 (JC-0283) 全体图



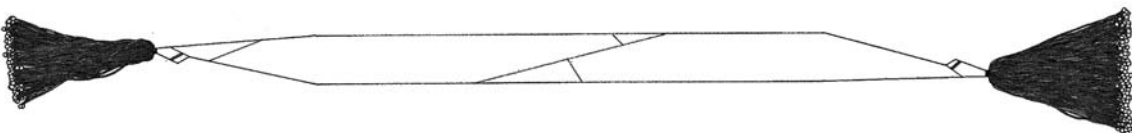
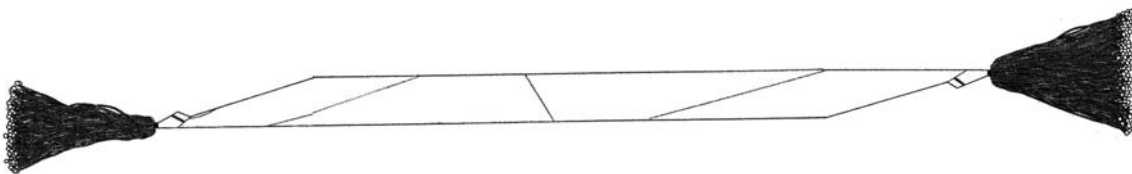
1-2 上衣 胸部放大



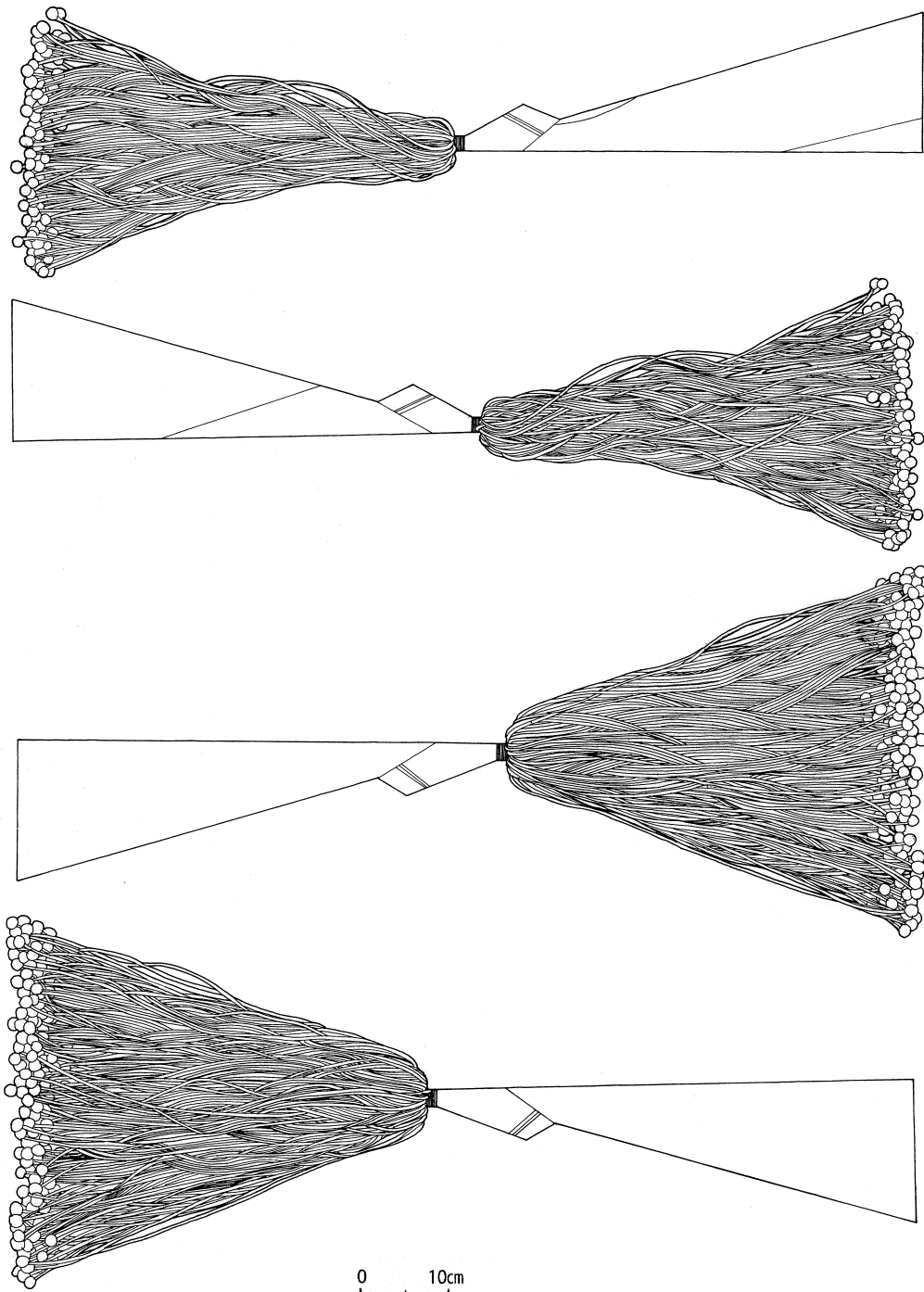
1-3 上衣 袖部分扩大 (上:左袖、下:右袖)



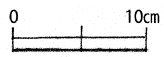
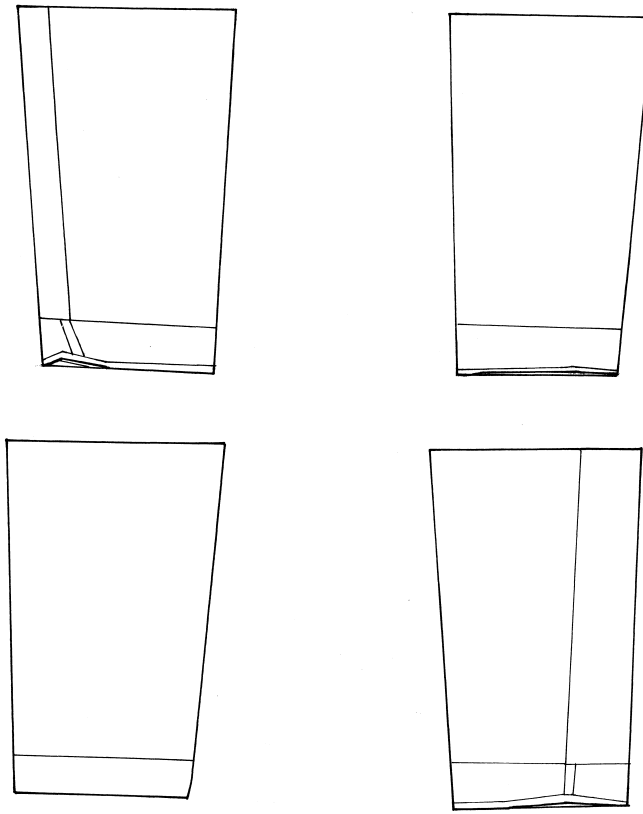
2 下衣 (JC-0286)



3-1 腰飾り (JC-0295) 全体図



3-2 腰飾り 房部分



4 脚絆 (JC-0290)
 (上：左脚 下：右脚)



写真1 リス族の女性たち (西北タイ歴史
 文化調査団撮影)

Traditional Costumes for Lisu Women

NISHIKAWA Yukari

Traditional costumes have the function as a symbol distinguishing one's own group from others. The characteristics, however, of those costumes — the core of symbolism — vary as they are influenced by people or materials. Traditional costumes for Lisu women, Thailand, collected in the Nanzan University Museum of Anthropology, also demonstrate the identity of the group by creating the original patterns of colour arrangement, whereas materials or technique changed after the transition of society and life style.

平成 27 年 3 月 13 日 印刷

平成 27 年 3 月 20 日 発行

南山大学人類学博物館紀要 第 33 号

編集・発行人 南山大学人類学博物館

466-8673 名古屋市昭和区山里町 18

TEL 052(832)3111 (代表)

印刷 株式会社クイックス

456-0004 名古屋市熱田区桜田町 19-20

TEL 052(871)9190